

# **立花南遺跡発掘調査報告書**

北上川中流部緊急治水対策事業（立花地区）関連遺跡発掘調査



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに書くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その大地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業團埋蔵文化財センターは設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、北上川中流部緊急治水対策事業（立花地区）に関連して平成24年度に発掘調査された北上市立花南遺跡の調査成果をまとめたものです。

遺跡は北上川のほとりにある自然堤防上に広がっており、縄文、弥生時代及び奈良、平安時代の集落として知られていますが、今回の調査地点ではほぼ弥生時代前末期（青木畠式期）を中心とした遺物包含層が見られ、この時期の土器様相を確認する資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理化につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年2月

公益財团法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 池田克典

## 例　　言

- 1 本報告書は、岩手県北上市立花第12地割58ほかに所在する立花南遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、北上川中流部緊急治水対策事業（立花地区）に伴う事前の発掘調査である。  
調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はME66-2128、調査略号はTM-12である。
- 4 発掘調査期間、担当者、調査面積は次のとおりである。  
平成24年6月6日～7月13日　金子昭彦　菅野　梢　634m<sup>2</sup>
- 5 室内整理と担当者は、次のとおりである。  
平成24年7月17日～平成24年3月31日　菅野　梢
- 6 本報告書の執筆は、第I章を国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、第IV章1遺構と遺物包含層の一部を菅野、そのほかを金子が担当した。
- 7 遺物の鑑定は以下の方に依頼した。  
石質　花崗岩研究会
- 8 発掘調査及び報告書作成に当たり、次の方にご協力・ご指導いただいた。  
北上市立埋蔵文化財センター
- 9 調査成果はこれまでに調査略報、当センターホームページなどに発表してきたが、本書の内容が優先するものである。
- 10 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 11 遺跡等の平面位置は、平面直角座標第X系を利用している（座標値は第III章参照）。
- 12 土層の色調は、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1990）を参考にした。
- 13 脚注、参考文献はそれぞれの章、節、項の後に記している。

## 凡　　例



敲打痕



強い敲打痕



磨面

S：石器

## 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 立地と環境	
1 位置・地形・調査範囲 .....	1
2 基本層序 .....	2
3 これまでの調査と周辺の遺跡 .....	2
(1) これまでの調査 .....	2
(2) 周辺の遺跡 .....	10
III 調査・整理の方法	
1 野外調査 .....	11
2 室内整理と報告書の作成 .....	12
IV 検出された遺構と遺物	
1 遺構と遺物包含層 .....	13
2 遺物 .....	14
(1) 縄文・弥生土器 .....	14
(2) 須恵器 .....	14
(3) 土製品 .....	14
(4) 石器・石製品 .....	15
V 総括	
1 特論 .....	51
(1) 立花南遺跡出土の縄文～弥生土器 .....	51
(2) 立花南遺跡出土の土偶 .....	55
2 遺跡のまとめ .....	57
(1) 立花南遺跡の歴史 .....	57
(2) 地域の中で .....	58
報告書抄録 .....	79

## 図版目次

第1図 遺跡の位置 .....	3	第3図 地形分類図 .....	5
第2図 今回の調査区 .....	4	第4図 これまでの調査範囲 .....	6

第5図	周辺の遺跡	7	第24図	縄文・弥生土器（16）	34
第6図	調査区全体図	16	第25図	縄文・弥生土器（17）	35
第7図	土器出土量分布図	17	第26図	縄文・弥生土器（18）	36
第8図	畝間状遺構、1号焼土	18	第27図	縄文・弥生土器（19）	37
第9図	縄文・弥生土器（1）	19	第28図	縄文・弥生土器（20）	38
第10図	縄文・弥生土器（2）	20	第29図	縄文・弥生土器（21）	39
第11図	縄文・弥生土器（3）	21	第30図	縄文・弥生土器（22）、須恵器、土製品（1）	40
第12図	縄文・弥生土器（4）	22	第31図	土製品（2）	41
第13図	縄文・弥生土器（5）	23	第32図	石器（1）	42
第14図	縄文・弥生土器（6）	24	第33図	石器（2）	43
第15図	縄文・弥生土器（7）	25	第34図	石器（3）	44
第16図	縄文・弥生土器（8）	26	第35図	石器（4）	45
第17図	縄文・弥生土器（9）	27	第36図	石器（5）	46
第18図	縄文・弥生土器（10）	28	第37図	石製品	47
第19図	縄文・弥生土器（11）	29	第38図	器種・器形別土器集成図（1）	52
第20図	縄文・弥生土器（12）	30	第39図	器種・器形別土器集成図（2）	53
第21図	縄文・弥生土器（13）	31	第40図	器種・器形別土器集成図（3）	54
第22図	縄文・弥生土器（14）	32	第41図	器種・器形別土器集成図（4）	55
第23図	縄文・弥生土器（15）	33	第42図	立花南遺跡出土土偶と類例	56

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	8
第2表	出土位置別土器重量	48
第3表	不掲載石器・剥片類（一部）観察表	49

## 写真図版目次

写真図版1	調査前風景	61	写真図版10	縄文・弥生土器（5）	70
写真図版2	基本土層、Ⅲ層確認状況	62	写真図版11	縄文・弥生土器（6）	71
写真図版3	畝間状遺構（1）	63	写真図版12	縄文・弥生土器（7）	72
写真図版4	畝間状遺構（2）、1号焼土	64	写真図版13	縄文・弥生土器（8）	73
写真図版5	炭化物集中区、調査区全景	65	写真図版14	縄文・弥生土器（9）	74
写真図版6	縄文・弥生土器（1）	66	写真図版15	縄文・弥生土器（10）、須恵器	75
写真図版7	縄文・弥生土器（2）	67	写真図版16	土製品	76
写真図版8	縄文・弥生土器（3）	68	写真図版17	石器（1）	77
写真図版9	縄文・弥生土器（4）	69	写真図版18	石器（2）、石製品	78

## I 調査に至る経過

立花南遺跡は北上川中流部緊急治水対策事業（立花地区）の築堤盛土工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

北上川は、岩手県岩手郡岩手町御堂にその源を発し、幾多の大小支川を合わせて岩手県を南に継ぎ、岩手・宮城県境の狭窄部を経て宮城県石巻市で太平洋に注ぐ、幹線路延長249kmの一級河川である。

事業対象地域である「立花地区」は、北上川上流右岸76km付近に位置し、平成14年7月洪水及び平成19年9月洪水により、僅か5年間で2度も甚大な浸水被害が発生している。背後地には住家等の資産が集中していることから早期の治水対策が必要となっているため、平成22年度事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手河川国道事務所から平成21年8月27日付国東整岩一工第63号「埋蔵文化財発掘の通知及び試掘依頼【北上川中流部治水対策事業（立花地区）】」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年9月7日に試掘調査を実施し、工事に着手するには立花南遺跡の調査が必要となる旨を平成21年9月16日付教生第795号「北上川中流部治水対策事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により事務所へ回答してきた。

その結果をふまえて当事務所は岩手県教育委員会と協議し、発掘調査を平成22年度に実施したが、更に追加調査が必要となったことから、調整をうけて平成24年4月9日付で公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

## II 立地と環境

### 1 位置・地形・調査範囲（第1～3図）

立花南遺跡は、JR東北本線北上駅の東約1km、主要地方道一関北上線沿いにあり、JR北上駅の北上川を挟んだ対岸の北上市立花に位置する。

北上川と和賀川の合流地点より北へ1.1km、北上川東岸に沿って形成された自然堤防上に立地し（第1図、第3図）、遺跡の西限は北上川の氾濫原、東限は段丘崖に沿う後背湿地である。遺跡は自然堤防の北東から南西へ700m、東西幅約200mほどの範囲にひろがっている。遺跡北半は畑が多かったが、公共施設もあり、近年宅地化が徐々に進んでいる。南半は西端に畑があるが、大半は水田である。

今回の調査範囲は遺跡の南西端付近にあたり、河川敷まで70mほどの距離である。標高は57～55m前後、現況は放置され荒れ地になった畑地である。調査区は最も標高の高い北東端で約57m。西側に向かって標高が下がり、西端では約55mで、約2mの標高差がある。調査区内西端には、旧河道が一部に検出されており、自然堤防の西側端部であることが窺える。

事業は北上川に沿って計画されたもので、今回調査区の北側と南側は平成22年度に当センターが行った前回調査区であり、一部は堤防が築かれつつある。

## 2 基本層序

調査区内は以下のような堆積状況である。

I層 耕作土 厚さ約20cm

II層 10YR4/4 褐色砂層 洪水堆積層 厚さ約30～60cm

III層 10YR3/1黒褐色～10YR4/2灰黃褐色土 砂質シルト 厚さ0～50cm。縄文時代末（大洞A'式期）～弥生時代前期（青木畑式期）遺物包含層。厚さ0～50cm。西側の自然堤防下には認められない。東側の自然堤防上の最も高いところは薄く、10～20cm程度で、一部見えない箇所もある。厚いのは、自然堤防が西側（北上川）に向かって下がり棚状をなす部分（小規模な後輩湿地か）で、間に10cm程度の褐色砂層を挟んで40～50cmになる。当初、この褐色砂層は自然堆積で、この上と下の包含層は時期が異なるのではないかと考えていた。しかし、出土土器に違いは認められず、砂層は一様ではなく、地点によって異なるので斜面上から崩れてきたか、竪穴住居等の掘削で出た砂を捨てたもので二次堆積ではないかと推測する。遺物包含層は出土遺物が多い地点ほど黒い。炭化物や焼土粒が集中して竪穴住居を窺わせる部分もあったが、底が平らでなく壁が確認できず、何より痕跡が見つかなかったので、住居とは考えなかった。

IV層以下：厚さ20cm程度の褐色（10YR4/4）洪水堆積砂層とシルト質褐色（10YR4/6）層の繰り返し。遺物が出土しないので時期は特定できないが、シルト質層には炭化物を含む地点もあり、隣接する前回調査区では焼土が検出されている。おそらく、洪水堆積後の表土がシルト質の層で、炭化物や焼土は、人が関わっている可能性がある。

## 3 これまでの調査と周辺の遺跡

### （1）これまでの調査

立花南遺跡では、これまで北上市教育委員会、岩手県教育委員会及び公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって発掘調査及び試掘調査が行われている（第4図）。

北上市教育委員会による発掘調査

2001年度の調査

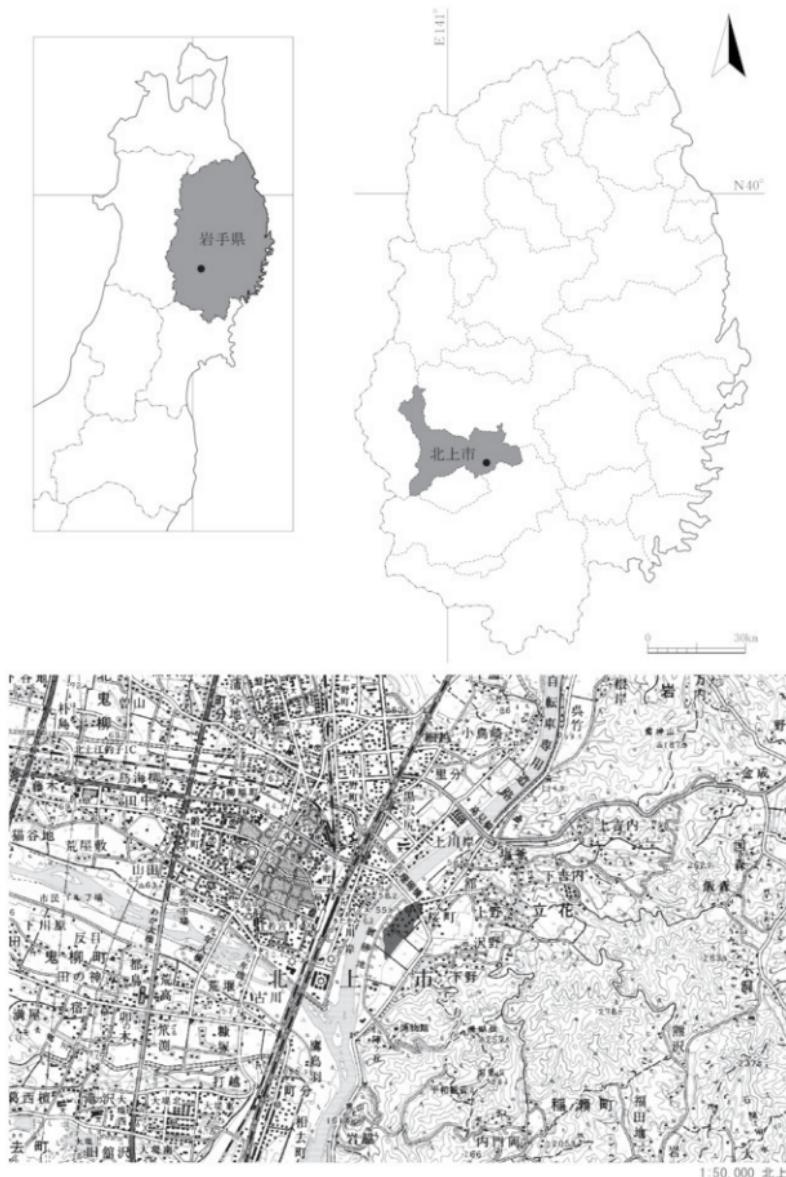
農地転用のため川岸より200mほど離れた自然堤防上の畑地を調査し、8世紀後葉～9世紀前葉の集落（竪穴住居跡6棟、竪穴状遺構2基、焼成遺構2基、土坑10基、溝跡2条）を検出。ロクロ未使用の段階～導入期の土師器、須恵器、鐵製品が出土。

2003年度の調査

農地転用のため川岸より200mほど離れた自然堤防上の畑地を調査し、9世紀第1四半期～半ばごろの集落（竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、焼成遺構1基、畝間状遺構に類似する平行する溝跡9条）を検出。土師器、須恵器、土玉、鐵製品、砥石のほか、縄文土器、弥生土器が出土。

2005年度の調査

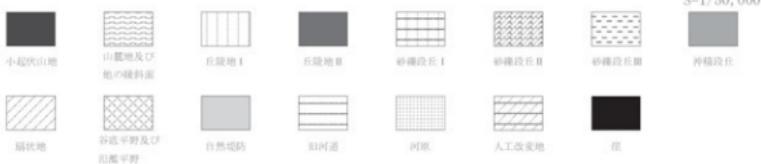
農地転用のため川岸より300m離れた自然堤防上の畑地を調査し、8世紀後半～9世紀前葉の集落（竪



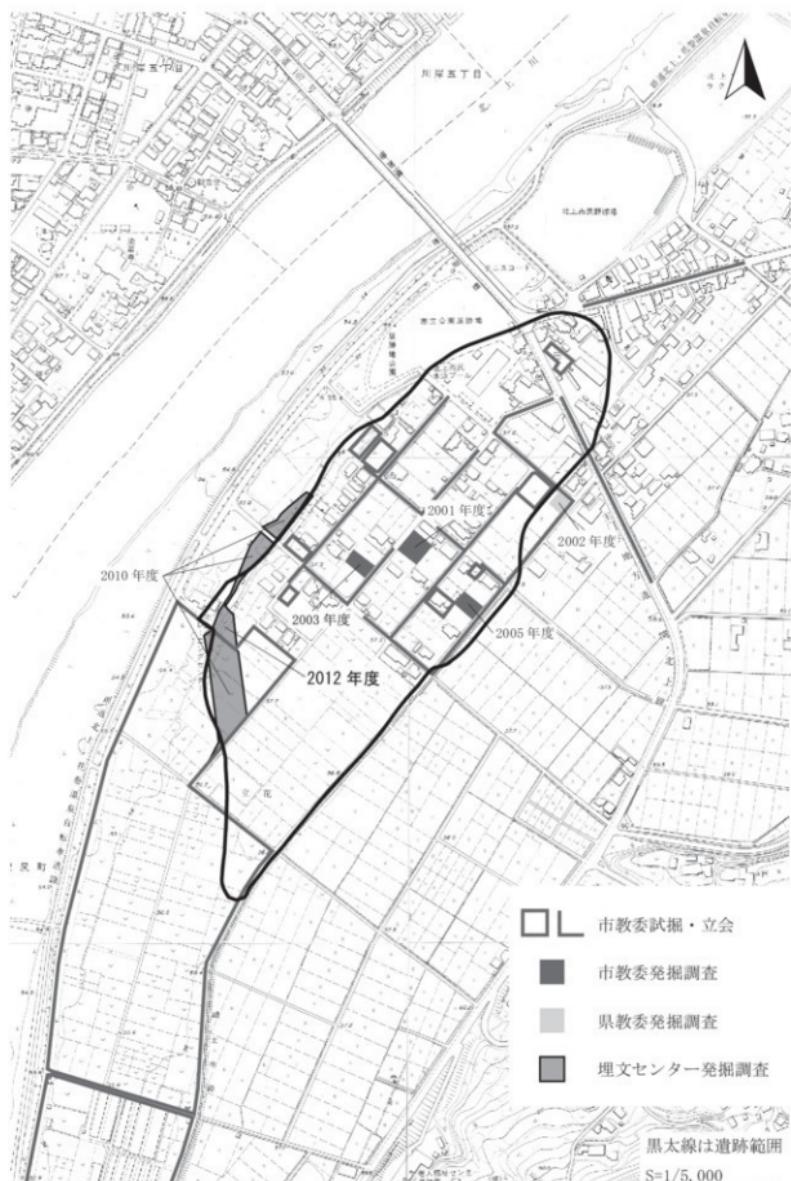
第1図 遺跡の位置



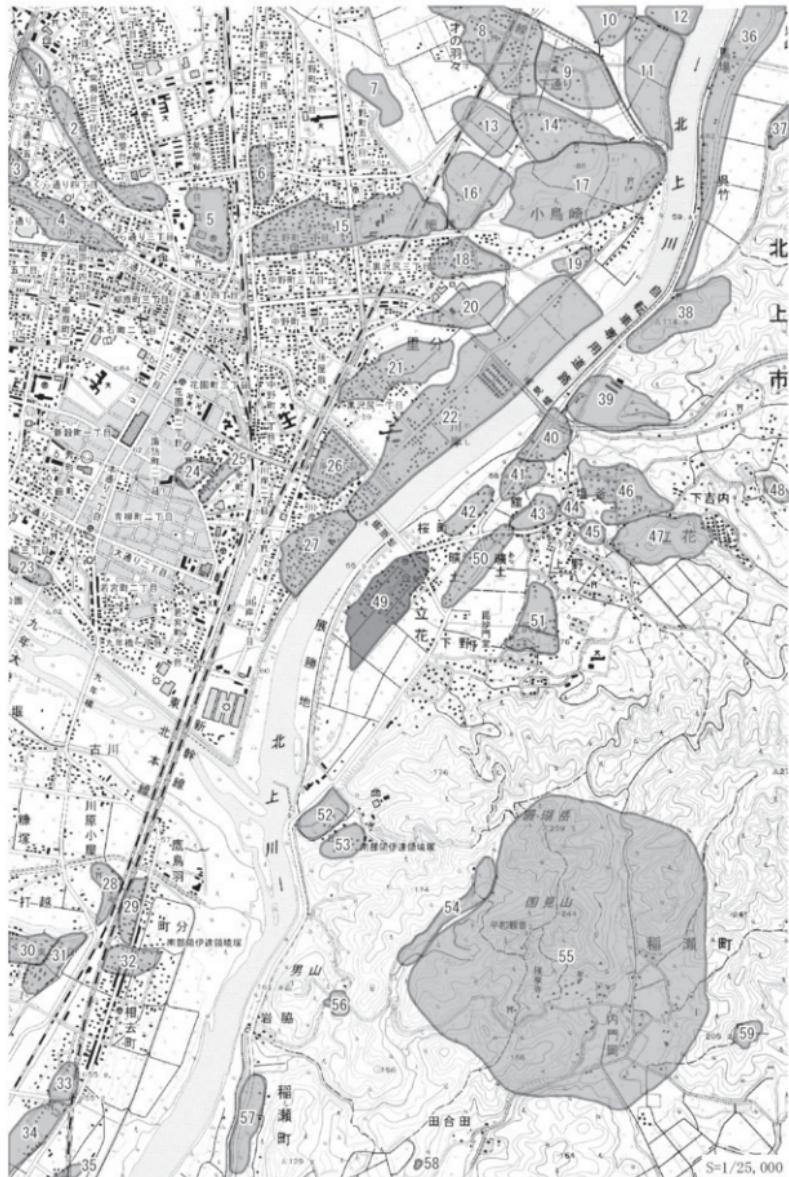
第2図 今回の調査区



第3図 地形分類図



第4図 これまでの調査範囲



第5図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	地名	時代	遺物	文献	備考	
1	御穴室跡群 安跡	平安	土師器、須恵器、堅穴住居跡	北上市史第1章、北上市埋蔵文化財調査報告第71・73・80集		
2	箕谷塚 箕谷地	平安	土師器、須恵器、堅穴住居跡	北上市埋蔵文化財調査報告第80集	箕沢尻西郡上地区に位置する事業地内遺跡として報告。	
3	箕谷地 I	散布地				
4	箕谷地 II	散布地	調文・奈良～平安 調文土器・石器・土師器、須恵器	北上市埋蔵文化財調査報告第34・124・126・128集、若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告第50集	箕沢尻西郡上地区に位置する事業地内遺跡として報告。	
5	箕沢尻北高ダグラス P	箕谷跡	平安	土師器、須恵器、鍾、砾石		
6	箕沢尻上野町住宅 箕谷跡	平安	土師器			
7	上野	散布地				
8	野田 I	散布地	弥生・調文・古代 弥生土器（後・後期）、舟生土器、土師器、須恵器	若手原文化財調査報告書第34・124・126・128集、若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告第50集		
9	中野遺跡	散布地	古代	土師器	若手原文化財調査報告書第105・108集	HG新規
10	萬島	散布地	古代	土師器・須恵器	北上市埋蔵文化財調査報告書第84集、若手原文化財調査報告書第126・128集	万島新規、既S5調査「野田山遺跡」として報告された遺跡と同一か?
11	千葉	箕谷跡	平安	舟生土器・土師器、須恵器		HG範囲変更
12	千葉村	箕谷跡	平安	調文土器、土師器、須恵器		
13	千葉城下	散布地				
14	中野遺跡 II	散布地	調文・古代 調文土器・土師器	若手原文化財調査報告書第105集	HG新規	
15	栗子山	散布地	調文 調文	調文土器（中期） 調文・平安 調文土器・土師器	若手原文化財調査報告書第105集、若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告第362集	HG範囲拡大
16	栗子山	散布地	調文	土師器		
17	鳥取館（鶴山）	城郭跡	中世 後期	土器、骨器	若手原文化財調査報告書第105集	
18	猪狩	散布地	調文	土師器		HG新規
19	小鳥崎	散布地	調文	調文土器 堅穴住居跡、土器、調文土器、舟生土器、土師器、須恵器	若手原文化財調査報告書第71集	HG新規
20	船下	箕谷跡	調文・弥生・平安	土師器、須恵器	北上市埋蔵文化財調査報告書第71集	
21	里分	箕谷跡	平安	堅穴住居跡、土師器		HG範囲変更
22	牡丹園	箕谷跡	調文・弥生・奈良・平安	調文土器（後・後期）、石器、須恵器、舟生土器、土師器、須恵器、堅穴住居跡	北上市史第1章（区域200～280）、北上市文化財調査報告第50・65集、北上市埋蔵文化財調査報告第58・76・84・91・95・96集、若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告書第53集	HG範囲変更
23	九年橋	箕谷跡	調文	調文土器（後期）、石器、堅穴住居跡	北上市文化財調査報告書第18・23・25・29・35・39・42・44・47・66集、若手原文化財調査報告書第99集	
24	藤谷津社境内	散布地	平安	土師器		「藤谷津遺跡」として報告。
25	和野	箕谷跡	調文	調文土器（中期）	北上市史第1章	
26	万八丁堀	散布地	平安			HG3黒沢尻線上名称変更、安倍岱とも呼ばれる。黒沢尻遺跡確定。
27	川岸	城郭跡、散布地	平安・中世・近世 調文	堅穴住居跡、須恵器、壺、陶器	北上市文化財調査報告書第20・34集	HG3黒沢尻より名称変更。
28	白駒館	城郭跡	中世			
29	鬼柳西裏	箕谷跡・経塚	平安・調文・中世 後世	調文土器、石器、土師器、須恵器、堅穴住居跡、經塚	若手原文化財調査報告書第50集	
30	大堤東	散布地	平安・調文	土師器、須恵器、土器		HG新規、HG範囲変更
31	酒館	酒窓、散布地	調文・近世・平安	調文土器（後期）、壺（江戸）、土師器、須恵器、堅穴住居跡	北上市埋蔵文化財調査報告書第71集、若手原文化財調査報告書第50集	HG2範囲変更
32	西野	散布地	平安	土師器、須恵器、堅穴住居跡	若手原文化財調査報告書第34集	
33	杉ノ木	散布地	平安	土師器、壺	若手原文化財調査報告書第34集	
34	小難沢	散布地	調文・平安	調文土器（中期）、須恵器、土師器	北上市埋蔵文化財調査報告書第73集	HG範囲拡大
35	八木塙	散布地	平安	土師器、須恵器	若手原文化財調査報告書第34集	
36	黒岩宿	箕谷跡	調文・弥生・平安	調文土器、舟生土器、小口打ち、陶磁器	北上市埋蔵文化財調査報告書第47集、若手原文化財調査報告書第112集、若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告書第397集、北上埋蔵文化財年報（2003）	HG新規
37	祖母	散布地	調文	調文土器・磨製石斧、石斧、石器		
38	防溪	散布地	調文	調文土器、石器		
39	祖町	箕谷跡	調文・奈良・平安 中世	調文土器、石器、土師器、須恵器、堅穴住居跡、堅立柱建物跡、礎石建物跡	北上市埋蔵文化財調査報告第21・38・60・72・90集、若手原文化財第36集、板橋御・御・佐々木清康（若手原北・市立花十三三姫御跡）、「北上市史・第2巻」	HG1・HG2・HG3・HG4・HG5・HG6
40	祖IV	散布地、箕谷跡	調文・平安・中世 近世	調文土器、石器、土師器、堅穴住居跡、堅立柱建物跡	若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告第187集	HG3範囲移動
41	祖II	散布地	調文	調文土器（中期）	若手原文化財調査報告書第108集、若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告書第300集	HG範囲拡大
42	立花館（鶴）	城郭跡	平安	土師器	若手原文化振興事業団の埋蔵文化財調査報告書第57集	
43	御園	散布地	調文	調文土器（中期）		
44	豆之木学校下	散布地	調文	調文土器、打制石斧		
45	V	箕谷跡	調文	調文土器、打制石器		

No.	遺跡名	種別	時代	遺物・遺物	文献	備考
46	蘿茶	散布地	縄文・平安	縄文土器（中・後期）、石器、土師器、須恵器	北上市埋蔵文化財調査報告書第93集	H14新規、H19範囲拡大
47	葉原	散布地・城垣跡	縄文・中世	縄文土器、瓶、糠器	北上市文化財調査報告第41集	H22範囲変更
48	城内七ツ森	埋	中世	灰	北上市文化財調査報告第43集	
49	立花湖	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石製品、木製品、金属製品、穴元住居跡、焼穴式造構、焼成遺構、疏水状遺構、土坑、溝	北上市埋蔵文化財調査報告第49・57・63・67・71・82・86・95・100・101集、 岩手県文化財調査報告書第14・116集、 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第588集	H22新規発見、H19範囲拡大、B19・B20・B22範囲変更
50	猪I	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）	北上市埋蔵文化財調査報告第69集、岩手県文化財調査報告書第99集、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集	
51	沢野	散布地	縄文	縄文土器、石器		
52	津ヶ岡	城垣跡	中世	甕		
53	原跡地	散布地	平安	土坑		
54	西分	散布地	平安			
55	御見山廢寺	寺院跡	平安	土師器、須恵器、碳石、植物碎、孤立柱建物跡	「北上市史 第1巻」、北上市文化財調査報告第11・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43集、岩手県文化財調査報告書第20・21・48・53集、岩手県埋蔵文化財年報（2003・2004年度）	H6.9.30 国指定史跡
56	男山	散布地	縄文	縄文土器	北上市文化財調査報告書第37集	
57	御鑑	散布地・塙墓	縄文・昭和・弥生・平安・近世	縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪（江戸）、繩状、柄鏡	北上市文化財調査報告第37集・北上埋蔵文化財調査報告第23集、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第235集	
58	御坂山	砂原	古代末～中世			
59	八王子森	散布地・城垣跡・林	平安・中世・平安	弥生土器、瓦器、陶器		H14新規

穴住居跡4棟、焼成遺構5基、土坑3基、柱穴状土坑1基）を検出。竪穴住居跡の中には棚状施設が認められたものもある。ロクロ未使用の土師器、銅製品、砥石のほか繩文土器（中期末葉）が出土した。土師器には特に赤彩のものがあること、銅製品があることが注目される。

#### 岩手県教育委員会による調査

2002年度

警察署派出所建設のため、川岸より300m離れた自然堤防の東縁辺部を調査し、時期不明の井戸跡と思われる土坑1基、古代と思われる焼土遺構2基を検出した。出土遺物は繩文土器片、須恵器片、土師器小皿片である。

#### 公益財団法人岩手県文化振興事業団による調査

2010年度

北上川中流域治水対策事業（立花地区）のため、川岸に近い自然堤防の西縁辺部を調査した。今回調査区の北側と南側である。縄文・弥生時代の焼土遺構1基、炭化物集中区1箇所、古代の集落（竪穴住居跡2棟、畠状遺構1箇所、溝跡2条、焼土遺構2基、炭化物集中区1箇所、旧河道3条）を検出した。縄文時代の土器は晩期中葉及び後葉であるがごく微量である。弥生時代の土器は包含層中に多くみられ、青木烟式期のものである。古代の土器はロクロ未使用の土師器を中心であり、8世紀後半以降と思われる。土師器、須恵器のほか、焼成粘土塊、鉄製品が出土したが、特に赤彩の土師器が出土していることが注目される。

以上のように本遺跡では自然堤防の頂部～東端では主に8世紀後葉から9世紀前半の集落（生産遺構と思われる畠間状遺構を含む）が検出されており、西縁部分では縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層が広がっていることが分かっている。

## 参考文献

- 北上市教育委員会 2002 「立花南遺跡」 北上市埋蔵文化財調査報告書第49集  
2004 「立花南遺跡（2003年度）」 北上市埋蔵文化財調査報告書第63集  
2007 「立花南遺跡（2005年度）」 北上市埋蔵文化財調査報告書第82集  
岩手県教育委員会 2003 「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成14年度）」  
岩手県文化財調査報告書第116集  
財団法人岩手県文化振興事業団 2011 「立花南遺跡」『平成22年度発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第588集

### （2）周辺の遺跡

北上市内には平成22年現在で513箇所の遺跡が登録されている。当遺跡の周辺には25,000分の1の図幅の範囲内で、58か所の周知の遺跡がある。

今回の調査の主体となった縄文時代晚期～弥生時代前期の遺跡は以下の様相である。

北上川の両岸に形成された自然堤防上の遺跡から土器が出土しているが、明確に遺構が確認された例はあまりない。北上川の支流の大堰川の自然堤防上の野田I遺跡、北上川右岸では千苅遺跡、幅下遺跡、牡丹畑遺跡で、左岸では黒岩宿、立花館、岩脇遺跡である。これらのうち千苅遺跡は平成23年度より調査が行われ、なお継続調査中であるが、堅穴住居跡のほか、焼土遺構、柱穴状土坑群、遺物包含層が検出され、大量の土器が出土している。立花南遺跡よりやや離れた稻瀬町の八王子森館からも弥生土器が出土しているらしいが、発掘調査は行われていない。

なお、図幅には入っていないが、本遺跡から北上川沿いに南へ3.5km下った左岸の自然堤防上の金附遺跡では平成14年～15年に発掘調査が行われ、該期の集落及び遺物包含層が検出されている。遺構としては掘立柱建物跡と思われる柱穴群、炉跡4基、焼土遺構27基、土坑8基、土器棺墓3基、捨て場3か所である。当遺跡からは磨製石斧等の未成品が大量に出土したことから、石器製作を主たる生業としていたことが推測されている。

縄文時代晚期の遺跡としては、野田I遺跡に隣接する中居俵III遺跡（9）、和賀川の自然堤防上に立地する九年橋遺跡（23）、北上川右岸の南館遺跡（31）、左岸の横町遺跡（39）、館IV遺跡（40）がある。

### III 調査・整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 調査経過

6月6日 器材搬入、現場設営  
6月7日 現場に繁茂する草刈、畠のビニール等雑物撤去  
6月8日 試掘開始  
6月11日 試掘 III層に弥生時代の包含層を確認。青木畠式単独の模様。重機による掘削開始  
6月12～13日 試掘を行いながら重機による表土掘削  
6月14日 前回と今回の調査区の境界を手掘り作業で確認。層序の照合を行う。検出作業開始  
6月15日 前回調査区との境界確認 掘削断面のクリーニング 調査区の最終確認  
6月18～27日 遺構検出、攪乱除去、包含層の広がり確認  
6月28日 III層トレンチ掘削 炭化物集中箇所、数か所検出 生涯学習文化課普専門員来跡 調査方法の指導を受ける  
7月2日～10日 III層掘削 炭化物集中区は住居ではないと判断 規範のみ抑えることとする  
斜面直下に遺物多い。土偶出土。1号焼土精査  
7月11日 III層掘削、IV層へのトレンチ掘削開始  
7月12日 終了確認 降雨のため搬出に向かた梱包作業  
7月13日 精査、収納

##### (2) 特記事項

###### クリッド設定

今回の調査区をカバーするグリッドは前回調査に倣い、次のように設定した。世界測地系（平面直角座標第X系）を用い、調査座標原点を X = -79,720.000, Y = 25,472.000 とし、座標南北軸にあわせ1辺100mの大グリッドと4m四方の小グリッドを組んでいる。グリッド名称は大グリッドの北から南に I・II・III・・のローマ数字、西から東へA・B・C・・のアルファベット大文字を与え、その組み合わせをグリッド名称とする。小グリッドは、大グリッド北西端から東に向かって a～y のアルファベット小文字、北西端から南に向かって 1～25までの算用数字による名称を与えた。今回の調査区は大グリッド II A の中に納まる。

遺物の取り上げ等の際には II A14j のように小グリッド単位で取り上げている。

委託測量により設置した基準点の座標値は

区1 : X = -79,856.000 Y = 25,500.000 H = 54.935m  
区2 : X = -79,852.000 Y = 25,516.000 H = 57.068m  
区3 : X = -79,856.000 Y = 25,516.000 H = 56.091m  
区4 : X = -79,892.000 Y = 25,516.000 H = 56.185m

で、上記の数値は世界測地系である。実測はこれに基づいて、平面は電子平板、断面は手実測で行った。

検出・精査

まず試掘を行い、Ⅲ層が弥生時代の包含層であることを確認し、重機によって表土を掘削した。その後、スコップでⅢ層まで粗掘りし、上面を検出後、徐々に掘り下げていった。調査区西端は旧河道が迫り、包含層がないことを確認したので、さらに重機で深掘りをかけ、下位の様相を確認した。

焼土、炭化物の集中などが見られた場合は掘削を止めてクリーニングを行い、遺構の有無を確認した。精査は基本的に半裁して断面記録後に完掘した。遺物の取り上げに関しては当初Ⅲ層中の上下層に分けて行っていたが、遺物を確認したところ、土器型式の変化が確認できないように思えたので、途中からⅢ層中の遺物は一括して取り上げている。写真記録は6×7判カメラ1台（白黒）、35mmデジタルカメラ（Canon EOS 5DMark II）を使用した。

遺構は調査着手順に登録した。遺構名は○号焼土、○号畝間状遺構のように付けたが、結果的に各1基のみであったため、畝間状遺構の号数は削除した。

## 2 室内整理と報告書の作成

### (1) 遺 構

冬季に遺構断面のデジタル化及び電子平板でとったデータとの照合を行い、遺構図版の作成を行った。また、並行して原稿執筆と遺構写真図版の作成を行った。

### (2) 遺 物

野外調査終了後、7月後半から整理作業を開始した。現場ではほとんど雨天の日がなかったために、水洗作業から行ない、以下の大別で仕分けして分類し、出土地点、層位を記した袋ごとに番号を付け、種類ごとに重量計測を行って、それぞれ集計した。

①縄文・弥生土器、②須恵器、③土製品、④石器、⑤石製品。

なお、鉄器も数点出土したが、現代ものと思われたので、登録していない。

次に、縄文・弥生土器の接合、注記、石器の分類を行った。土器の注記はすべての破片に記入する時間がなかったので、報告書に掲載するもののみとしたが、その際は接合した破片についてはすべて注記し、一つの土器についてどの位置からどのくらいの割合で出土したかわかるよう心掛けた。注記は基本的に遺跡名と袋番号とした。夏場は調査員が現場に出ているので、石器の分類は作業員が行い、後日調査員が点検するという方法で行った。

立体に復元されそうな土器については、復元作業（石膏入れ）の前に計量したが、破片のものに関しては復元前に計量するのを忘れてしまった。表中の重量が（ ）内のものが数点あるが、それは石膏が入った状態の重量である。

その後、復元作業を行い、実測及び写真撮影を行った。石器及び石製品については、分類し、調査員が種類ごとに代表的なものを選出して、登録した。その後作業員が実測、トレースを行った。なお、剥片以外の不掲載石器及び石製品は、種類、重量、石質を一覧表として掲載している。土製品については、すべて掲載している。

冬場には残っていた実測図のトレース、拓本、図版作成、遺物写真図版作成を行った。調査員はこの間遺物観察表作成、原稿執筆を行った。3月には各種台帳などの整備を行い、月末に収納を行った。

土器の図版はグリッド順としており、その中でおおむね高坏、浅鉢、深鉢、蓋、壺の順に並べている。石器は器種ごとに並べた。

遺物の観察表は図版の下位に載せてある。本文中の記述については、観察表に載らないことを記した。本文中に記載がある場合は観察表に記載ページを載せた。

## IV 検出された遺構と遺物

### 1 遺構と遺物包含層

古代の可能性の高い畝間状遺構1基、縄文時代末～弥生時代前期の焼土1基、遺物包含層を検出した。調査区南西隅で、南側の当センター平成22年度調査区から続く旧河道跡を検出したが（第6図）、前回調査を上回る知見は得られず、時期も古代より新しいことから、割愛したい。

#### 畝間状遺構（第8図、写真図版3・4）

＜位置・検出状況＞調査区中央のII A12 k～II A14 j グリッド付近に位置する。検出された面積は約45m<sup>2</sup>である。本遺構は、調査区東側の自然堤防上から西側へと続く小規模な後背湿地と思われる棚状地形をなす緩斜面周辺で、II層の再堆積と思われる溝状のプランがほぼ平行に並んで11条検出された。溝状プランの方向はN-57°-W～N-64°-Wである。検出面はIII層である。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形＞にぶい黄褐色の溝状プランが50～197cmでほぼ平行して検出された。溝状プランの幅は25～33cm、長さは0.9～2.8mである。底面と壁は内湾しているものもあれば、底面が一定しないものもあり、一様でない。深さは8～15cmである。

＜埋土＞II層と性質がほぼ同じにぶい黄褐色砂であるため、II層の再堆積と考えられる。

＜遺物＞本遺構から弥生土器314gが出土し、うち第30図265の弥生土器高环破片1点（59g）を掲載した。

＜時期＞出土遺物、埋土の関係から弥生時代前期末以降と考えられ、南側に隣接する地区の当センターによる調査結果から、古代の可能性が高い。

#### 1号焼土（第8図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞調査区中央のII A14jグリッドに位置する。検出面はIV層で、検出した標高は56.4m前後である。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形＞暗赤褐色の焼土が梢円形に形成されている。径は72cm×68cmで、純粹な焼土の厚さは最大で4cm程度である。

＜堆積状況＞上層に純粹の焼土が形成されており、下層は焼土粒を多量に含む鈍い赤褐色の砂質シルトである。

＜遺物＞焼土中よりLR（0段多条）横方向に施文された深鉢破片が1点出土しているが、小片で図化に至らなかった。

＜時期＞検出された層位から縄文時代末～弥生時代前期と考えられる。

#### 遺物包含層（第6・7図、写真図版2・5）

＜位置・検出状況＞本調査区内では西側の低地を除くほとんどが縄文時代晩期末～弥生時代前期の包含層である。検出面積はほぼ325m<sup>2</sup>で、基本土層のIII層に相当する。

＜厚さ・堆積状況＞南～東端の自然堤防上は薄く20cm程度、北～西側の後背湿地は厚く30cm程度であるが、西端は10cm以下になる。厚い地点には炭化物を多く含む黒色度のやや強い包含層が数層砂の間層を挟んで堆積しているが、特に上下で時期差は認められない。厚い地点は、いわゆる捨て場的様相を示す。精査開始前は、試掘トレンチを入れていた東端と、重機で深掘りして広がりを確認していた

西端、前回調査区と隣接する南端は、いずれも薄く淡く、「遺物包含層」に過ぎないと判断した。南端でも、西端は厚くて捨て場の様相を呈しているのであるが（第7図）、ここには南側に排土するための道（ベルト状）を残していたため、精査開始前には見ることができなかつたのである。また、前回調査した南側隣接区では縄文・弥生時代の遺物はそれほど出土していなかつたこともある。こうした理由によりベルトを残さず掘り下げるにしたのだが、調査が進むにつれ、層が幾つかに分かれ出土遺物も多くて捨て場の様相を呈する地点があることがわかつた。精査開始前には把握していなかつた遺物包含層の中央部分が北東から南西方向に伸びる後背湿地状を呈し、そこを中心に厚い捨て場が形成されているとわかつたのは、調査も終盤になってからである。今回調査で断面図を作成できなかつたのは、こうした経緯により時機を逸したためと最後まで残つた北壁は梅の木が邪魔で作図できなかつたこと、さらに北壁も含め、東壁、南壁（上述の南西端除く）は遺物包含層が貧弱で淡く薄く作図するに値しなかつたことによる。お詫びする次第である。

＜重複関係＞本層の上面で畝間状遺構が検出された。また、本層の下位のIV層上面から焼土遺構が検出されている。

＜遺物＞今回の出土遺物のほとんどを占める。グリッドごとの土器の総量を第2表と第7図に示した。第6図と比べると北東から南西に延びる後背湿地に出土量の多いことがわかる。なお、第7図の南東部分が白抜きになっているが、これはグリッドでなく「東壁トレンチ・Ⅲ層」として取り上げたためであることをお断りしておく。

＜時期＞出土遺物から縄文時代末大洞A式から弥生時代前期青木畠式期の遺物包含層と認められる。

## 2 遺 物

今回出土した遺物は、縄文・弥生土器が大コンテナ(32×42×30cm)11箱で153kg、須恵器は1点小1袋で5g、土製品が16点（土偶8点ほか）小1袋で392g、石器類が大コンテナ6箱で117kg（石鎚15、削搔器10、磨製石斧（未成品）36、凹石・磨石14点ほか、剥片類78kg）、石製品が8点（石棒未成品6、管玉1、環状石製品1点）1袋1,570g、陶磁器小1袋48gである。陶磁器は現代のものであったため割愛した。

### （1）縄文・弥生土器（第9～30図）

縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器であり、ほとんどは弥生時代前期のものと考えられる。大コンテナ(32×42×30cm)11箱で153kg 出土し、267点約33kgを掲載した。「約」としているのは、石膏が入ってから計量をした破片が数点あるためである（表中（ ）内）。遺構内出土のものがほとんどなく、グリッドと層位であげているが、出土位置の欄に複数のグリッドが記載してあるものは、出土位置割合を分数で示しており、割合の多いグリッドの方に掲載している。

外面、内面の観察事項の欄の→は施文順序を表す。

[掲載基準] まとまった時期のものと思われる所以、小片でも文様の分かるものはすべて載せた。

### （2）須恵器（第30図268）

1点のみの出土である。

### （3）土製品（第30図269～272）

土偶8点、不明1点、円盤状土製品5点、粘土塊1点、土人形1点、すべて掲載した。

## (4) 石器・石製品（第32～37図）

[概要] 石器類が大コンテナ6箱で117kg、石製品が1袋1,570g出土した。内訳は、石鎚15点、石錐4点、石箆1点、削搔器10点、磨製石斧（未成品）36点、敲石5点、凹石・磨石14点、砥石2点、石皿2点、管玉1点、環状石製品1点、石棒（未成品）6点、調整のない剥片・石核、礫石器の破片が78kg出土している。

[掲載基準] 器種ごとに分類し、代表的なものを最小限掲載するにとどめたが、石斧の未成品については多めに掲載している。調整のない剥片・石核は、黒曜石の1点掲載したのみである（第36図313）。また、不掲載品についても観察表を作成しており（第3表）、トゥールに関しては不掲載分を全て網羅しているが、調整のない剥片・石核は一部に留まっている。

[分類] 立花南遺跡から3kmしか離れていない当該期の遺物が大量に出土した金附遺跡の分類に則っている（（財）岩手県文化振興事業団 2006）。

## (a)石鎚（第32図285～287）

15点出土し、3点掲載した。未成品を0類（小片で詳細不明）とI類、使用痕のある完成品をⅢ、その他をII類とした。I類では、石鎚の形が出来はじめているものを2類、それ以前を1類、2類の中でも、ほぼ完成しているものを2・2類、それ以前を2・1類とした。II～Ⅲ類では、基部が突出する凸基をA類、突出しないものをB類とし、A類の中で細長いものをa類、幅があるものをb類、その他をc類、B類の中で基部が鋭角的に窪むものをa類、弧状に窪むものをb類とした。その結果、I 2・1類3点、II A a類が10点、II A b類が1点、II B a類が1点となった。

## (b)石錐（第32図288）

4点出土し、1点掲載した。小片で不明なものを0類、つまみ（把手）のあるものをII類、その他棒状のものをI類とし、欠損品をa類、完形品をb類とした結果、0類が2点、I a類が1点、II a類が1点となった。

## (c)石箆（第32図289）

1点出土し、掲載した。

## (d)削搔器（第32図290）

10点出土し、1点掲載した。

## (e)磨製石斧（未成品）（第32図291～第34図301）

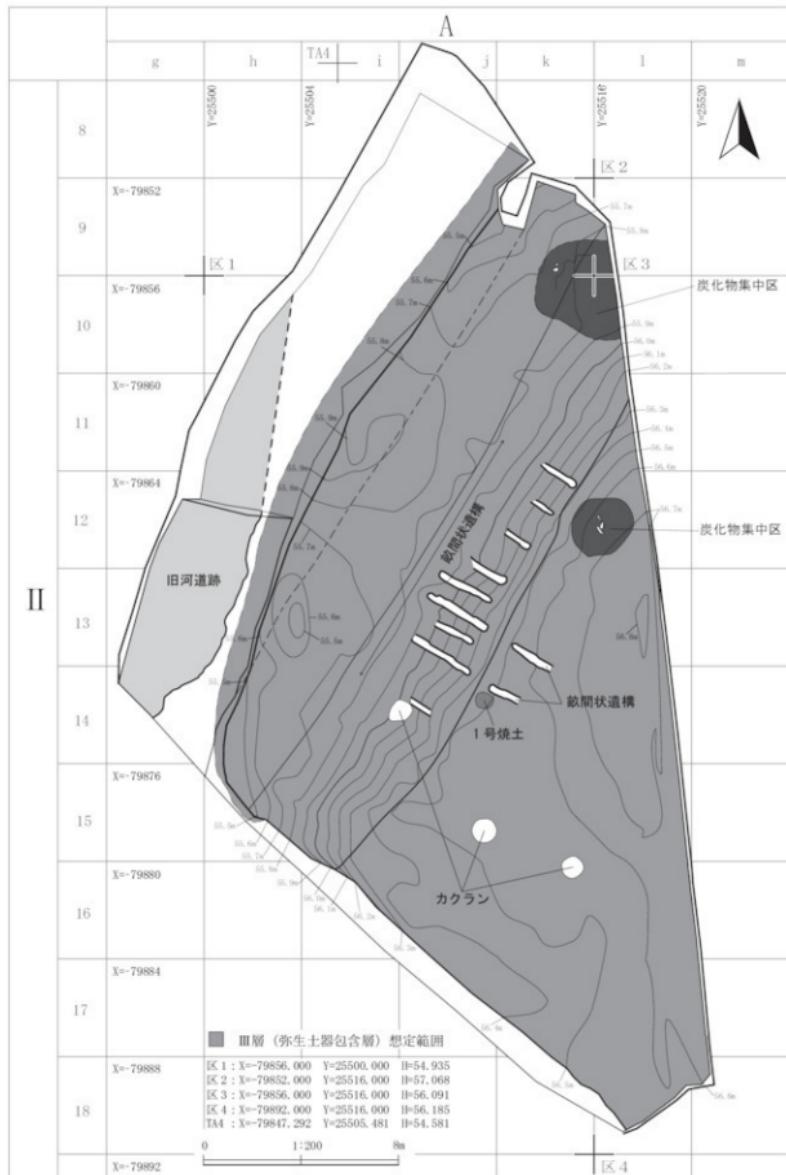
36点出土し、11点掲載した。全て未成品である。原石を0類、剥離段階に留まっているものを1類、敲打段階のものを2類、研磨段階のものを3類とし、1類のうち磨製石斧の形になっているものをB類、それ以外をA類とした結果、1 A類22点、1 B類6点、2類7点、3類1点となった。石材は比較的多様である。

## (f)敲石・凹石・磨石（第34図302～第36図310）

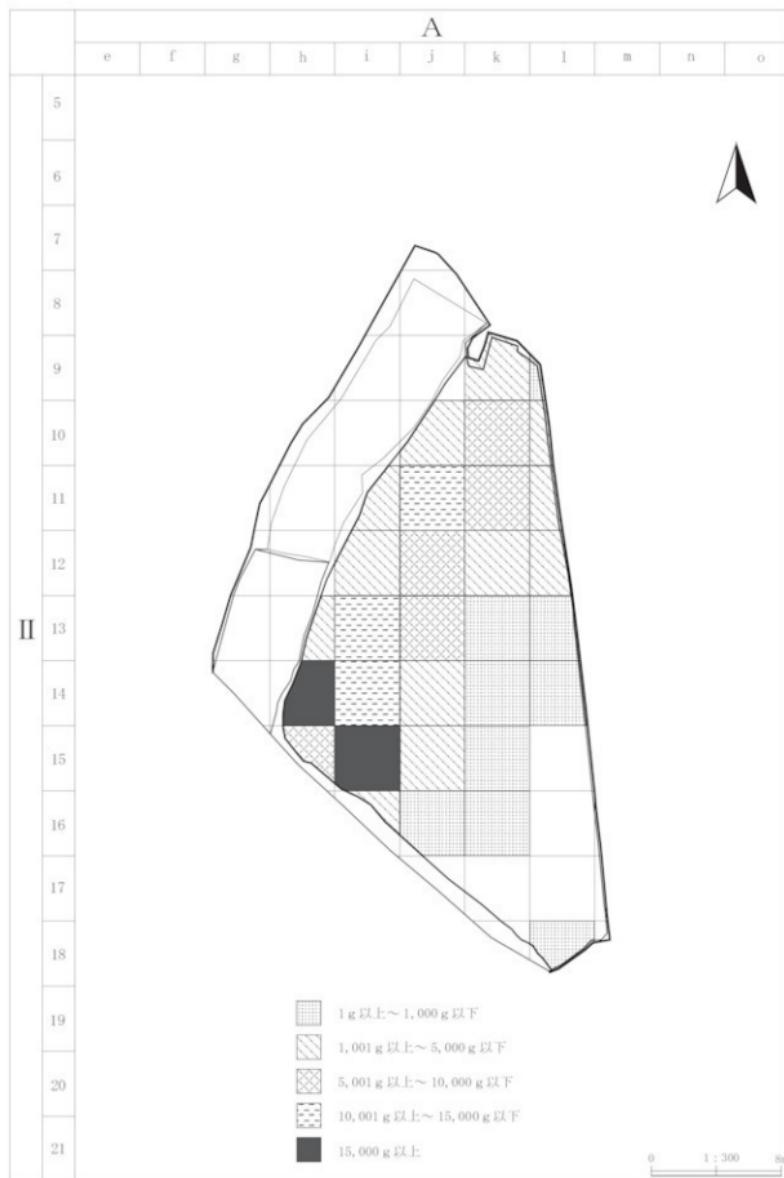
敲石は5点出土し4点掲載、凹石・磨石は14点のうち5点を掲載した。これらは、堅果類の加工に使われたと一般的に推測されているものであるが、今回の調査で出土した敲石のはほとんどは、強い叩打面を持ち、むしろ磨製石斧の製作等に使われたと思われるものである。敲石は、片手で持てる通常のものを1類、凹石状のものを2類、板状を3類、棒状を4類、掌に隠れる小さなものを5類、片手で持てない大きいものを6類とした結果、1類が3点、3類が1点、5類が2点となった。

## (g)砥石・石皿（第36図311、312）

砥石は2点出土し全てを掲載、石皿は3点出土したが小片のため掲載しなかった。

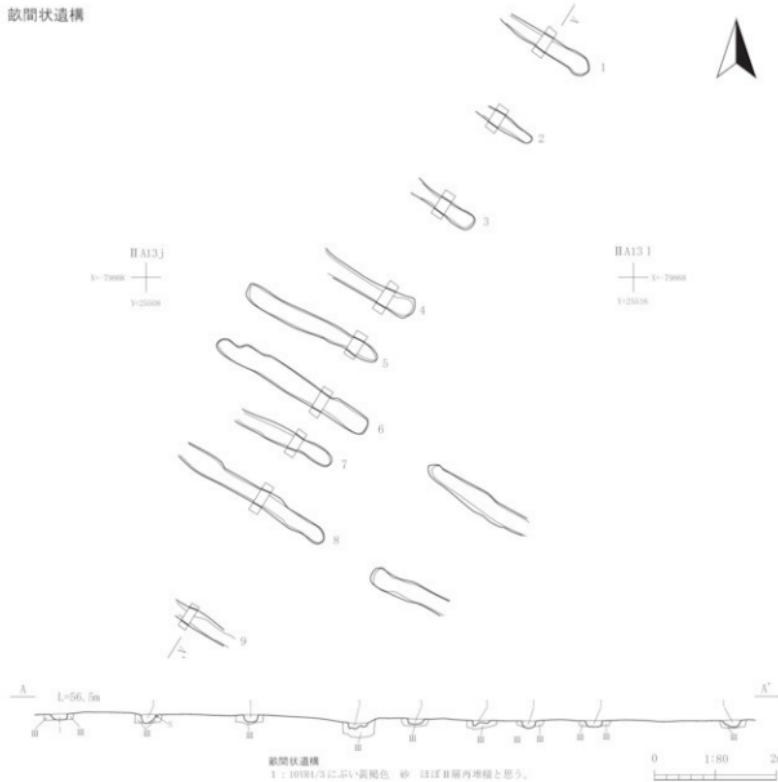


第6図 調査区全体図

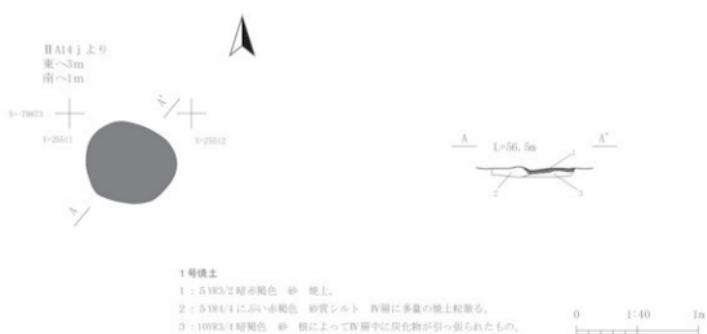


第7図 土器出土量分布図

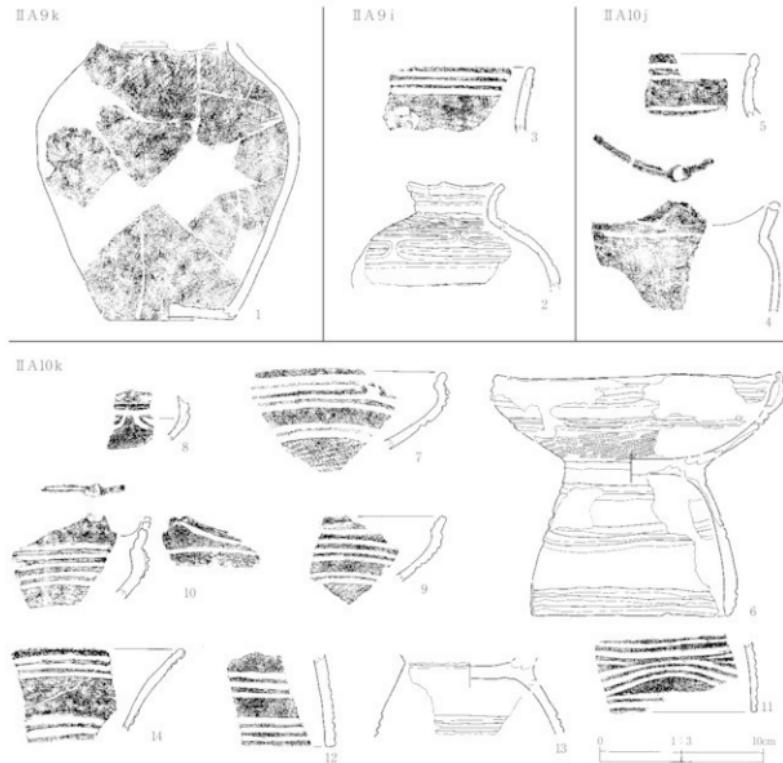
## 竪間状遺構



## 1号焼土



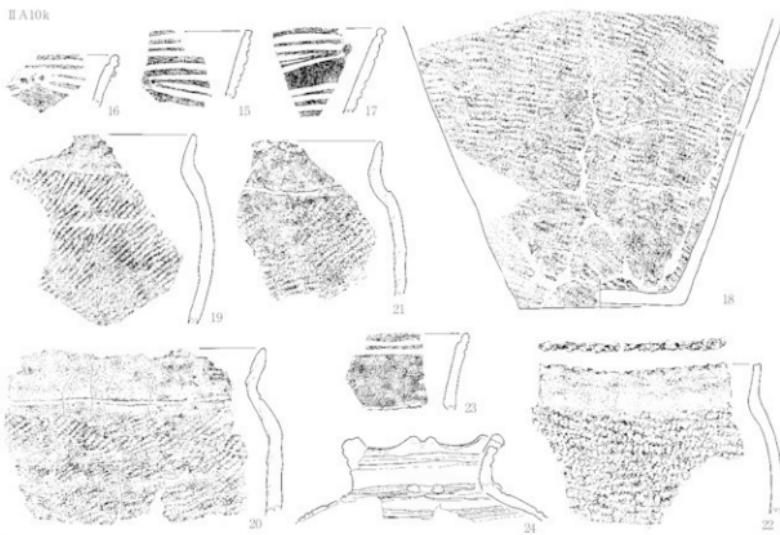
第8図 竪間状遺構、1号焼土



立花南遺跡土器観察表

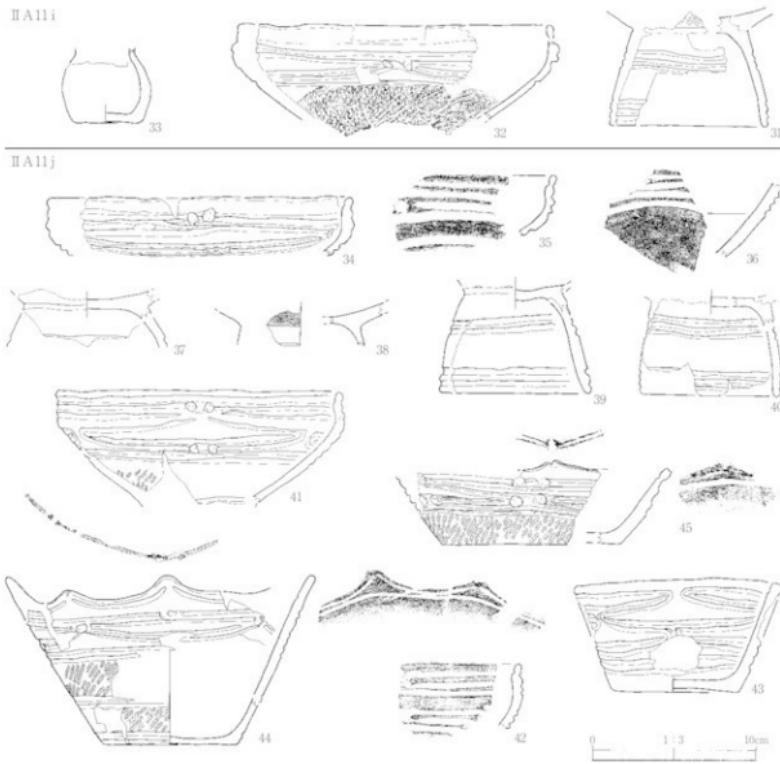
No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
1	II A9k Ⅲ層	280.7	壺 1/3	上半にのみLR模？(摩耗) 下半はナデ	ナデ	部分的に赤色顔料が少量詰められる
2	II A9i Ⅲ層	106.2	壺 上半	ミガキ	ナデ 輪積底	金雲母
3	II A9i Ⅲ層	25.7	壺 口縁破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
4	II A10i Ⅲ層	26.0	深鉢 破片	口縁ミガキ、胸部ナメ、口唇に沈線 山形口縁の張詰気が見	ミガキ	金雲母
5	II A10i Ⅲ層	15.8	壺 口縁破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
6	II A10k Ⅲ層	503.7	壺下 LRナメ 4/5 単位	ミガキ	ミガキ	金雲母 剥落度高い
7	II A10k Ⅲ層	35.4	高杯 口縁～胸部 破片	ミガキ、変形工字文交叉部剥り去り一粒土粒形成 下半LR模	ミガキ	金雲母
8	II A10k Ⅲ層	6.2	高杯 口縁部破片	ミガキ 四字文？	ミガキ	外面に赤彩少量残存
9	II A10k Ⅲ層	16.3	高杯 口縁部破片	ミガキ 下半LR模	ミガキ	金雲母
10	II A10k Ⅲ層	28.3	高杯 口縁部破片	ミガキ 口唇沈線 山形口縁の張詰にキザミ	ミガキ	金雲母 内外縁の裏面や底辺に赤彩少量残存
11	II A10k Ⅲ層	23.4	高杯 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 シカラ少量含む
12	II A10k Ⅲ層	22.5	高杯 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
13	II A10k Ⅲ層	90.0	高杯 脚破片	ミガキ 沈線3本単位	ミガキ	金雲母 赤彩ごく少量残存
14	II A10k Ⅲ層	28.3	鉢 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 弧曲

第9図 繪文・弥生土器（1）



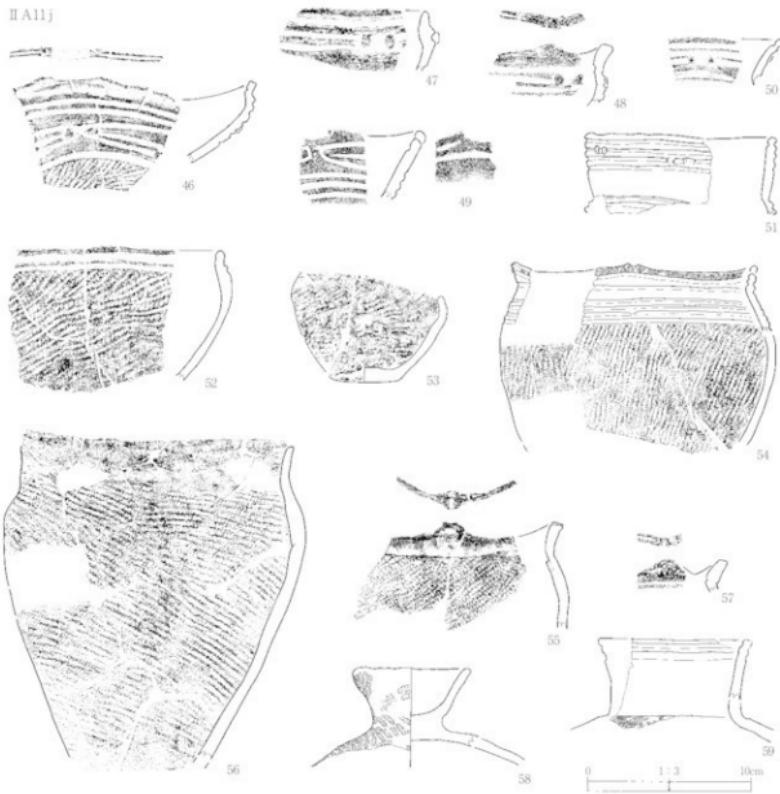
No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
15	II A10k Ⅲ層	15.0	鉢 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
16	II A10k Ⅲ層	9.9	鉢 口縁部破片	ミガキ 粘土粒	ナデ	金雲母 やや外反
17	II A10k Ⅲ層	17.3	鉢 口縁部破片	ミガキ 低い粘土粒	ミガキ	金雲母
18	II A10k Ⅲ層	815.6	深鉢 脇部～底	LNR 壱～胴部下端 脇部上半に煤 1/2.	ナデ 脇部下半に煤 少量	
19	II A10k Ⅲ層	86.7	深鉢 口縫～胴部 破片	LNR 口縫部ナデ 煤一部付着	ナデ、おこげ	
20	II A10k Ⅲ層	180.6	深鉢 口縫～胴部 破片	LNR 口縫部ナデ	ナデ 煤積痕	胎土に砂含む
21	II A10k Ⅲ層	71.9	深鉢 口縫～胴部 破片	LNR 口縫部ナデ 煤積み底残る 脇部沈縫 にこげ	ナデ 煤積痕 おこげ	金雲母
22	II A10k Ⅲ層(下)	109.4	深鉢 口縫～胴部 破片	LNRナメ 口縫部ナデ 口唇施文 煤	ナデ	砂含む
23	II A10k Ⅲ層	21.5	壺 口縫部破片	ミガキ 口縫突起部単位	ミガキ	金雲母
24	II A10l Ⅲ層 2/7-Ⅲ A10k 2/7-11; 1/7-11k 1/7-12; 1/7 Ⅲ層	145.8	壺 口縫～胴部上 半破片	ミガキ 変形工字文交叉割割り去り～粘土粒 形成 口唇部沈縫 山形口縫頂部にキズミ	ナデ	**
25	II A10l Ⅲ層	16.5	鉢 口縫部破片	ミガキ	ミガキ	
26	II A10l Ⅲ層	27.8	鉢 口縫部破片	変形工字文交叉割割り去り～粘土粒形成	ミガキ	金雲母
27	II A10l Ⅲ層	26.2	鉢 口縫部破片	ミガキ	ミガキ	
28	II A10l Ⅲ層	44.4	壺 つまみ	ナデ	ナデ	金雲母少量
29	II A10l Ⅲ層	75.0	壺 口縫部	ミガキ 口縫部2本沈縫 工字文交叉割に小さな な凹凸有無貼り付け ナデ(胴部上端に地文(LR?)らしきもの残る)→ ミガキ	ミガキ	赤色胎土少量残存
30	II A10l Ⅲ層	269.8	小形壺 口縫欠	ミガキ	ナデ	

第10図 繩文・弥生土器（2）



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外観(施文など)	内面(調査など)	備考
31	II A11: Ⅲ層 2/3・Ⅲ A13: 1/3	355	高坏 脚破片	ミガキ	ナデ	
32	II A11j: Ⅲ層底外面	970	浅鉢 破片	瓦方牛 变形工字文交叉部削り去り→ 粘土粒形成? LR7模	ミガキ	金雲母
33	II A11j: Ⅲ層下	639	ミニチュア壺 口縁を欠く	ナデ	ナデ	内面に赤彩付着 外面にタール状の付着 赤色顔料容器?
34	II A11j: Ⅲ層(下)	643	高坏 口縁破片	ミガキ 粘土粒	ミガキに近いナデ	金雲母
35	II A11j: Ⅲ層	238	高坏? 口縁削破 片	変形工字文交叉部削り去り→粘土粒形成 ミガキ	ミガキ	金雲母
36	II A11j: Ⅲ層	297	高坏 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
37	II A11j: Ⅲ層	961	高坏 底～脚部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 内面に赤彩少量残存
38	II A11j: Ⅲ層	309	高坏 深～脚部破片	LR7模～ナナメ	ミガキ	金雲母 黒っぽい
39	II A11j: Ⅲ層(下) 2/3・Ⅲ A10: Ⅲ層(下) 1/3	1153	高坏 脚	ミガキ	ミガキ	金雲母少量
40	II A11j: Ⅲ層	646	高坏 脚破片	ミガキ 沈縫3本組	ミガキ	金雲母 沈縫に赤彩残す
41	II A10: Ⅲ層 2/5・Ⅲ A11: 3/5	201.7	浅鉢 1/2	瓦方牛 下半LR縫(茎脚) 变形工字文(3單位) 交叉部削り去り→粘土粒形成	ミガキ	金雲母 沈縫内に赤彩少し残る
42	II A11j: Ⅲ層	198	浅鉢? 口縁部破片	変形工字文交叉部削り去り→かすかな粘土粒形成、ミガキ	ミガキ	金雲母少量 沈縫内赤彩残存
43	II A11j: Ⅲ層	195.5	浅鉢 2/3	ミガキ	ミガキ	金雲母 沈縫内に赤彩残存
44	II A11j: Ⅲ層(下)	170.7	浅鉢 1/3	変形工字文交叉部削り去り→粘土粒形成 (片縫)	ナデ 底部模	
45	II A11j: Ⅲ層 2/3・Ⅲ A10: Ⅲ層 1/3	985	浅鉢 破片	変形工字文交叉部削り去り→粘土粒形成 山形削頂直側にナザELR縫	ミガキ	金雲母 沈縫内に赤彩残存

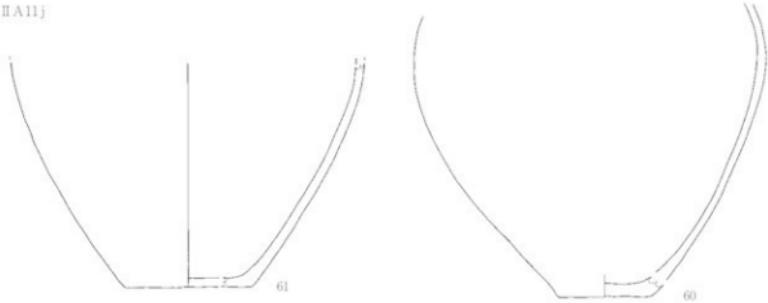
第11図 繩文・弥生土器（3）



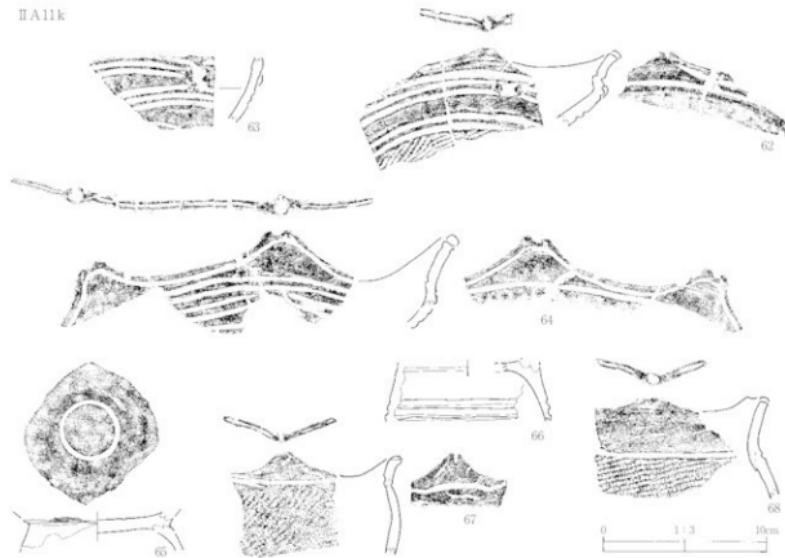
No.	位置・帶位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内部(調整など)	備考
46	II A11j III層	46.3	鉢 口縁～胴部破片	変形工字文交叉割割り去り→粘土粒形成	口	ミガキ
47	II A11j III層	26.1	鉢 口縁部破片	変形工字文交叉割割り去り→粘土粒形成	ミガキ	金雲母
48	II A11j III層	15.6	鉢? 口縁部破片	変形工字文交叉割少し削り去り→粘土粒形成	ミガキ	
49	II A11j III層	17.7	鉢 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
50	II A11j III層	95	鉢 口縁部破片	変形工字文交叉割割り去り→粘土粒形成、ミガキ	ミガキ	金雲母
51	II A11j III層	39.5	鉢 口縁部破片	変形工字文交叉割に削り去り 粘土粒	ナデ	金雲母 沈緑に赤彩残存
52	II A11j III層	62.7	鉢 口縁～胴部破片	2種より併せ 口縁部ミガキ	ミガキ?	金雲母
53	II A11j III層	100.4	小形鉢 1/2	おおむねLR構	部分的に縫	ナデ 金雲母 少量
54	II A11j III層 2/3・II A12j III層 1/3・II A東壁レンチ	211.6	深鉢 口縁～胴部の1/2	LR構 口縁部ミガキ 波状口縁の頂部にキサギ	ミガキ 全体に煤	地文、縄文に赤彩残存 全体にこげ
55	II A11j III層(下) 1/2・II A12j III層(下) 1/2	52.4	深鉢 口縁部破片	LR構 口縁部ミガキ 口唇部一部に沈緑、山形口縁頂部にキサギ 煤、こげ	ミガキ 胴部ナデ 煤、こげ	金雲母少量
56	II A11j III層・II A11j III層(下)	695.9	深鉢 口縁～胴部下半	LRテ口 細部上半様	ナデ 上半輪積痕	金雲母
57	II A11j III層	53	小形深鉢 口縁部破片	ミガキ、剥突、山形口縁頂部キサギ 口唇部	ナデ	キサギに赤彩残存 1035. 1036と同一個体
58	II A11j III層	156.9	鉢 つまみ～身破片	LR構～縫	ナデ、一部煤	金雲母
59	II A11j III層	69.1	鉢 口縁～胴部破片	口縁部ミガキ 脇部LRナメ 口縁部沈緑2本組	ミガキ	金雲母 内外に赤彩少量残存

第12図 繩文・弥生土器 (4)

II A11j

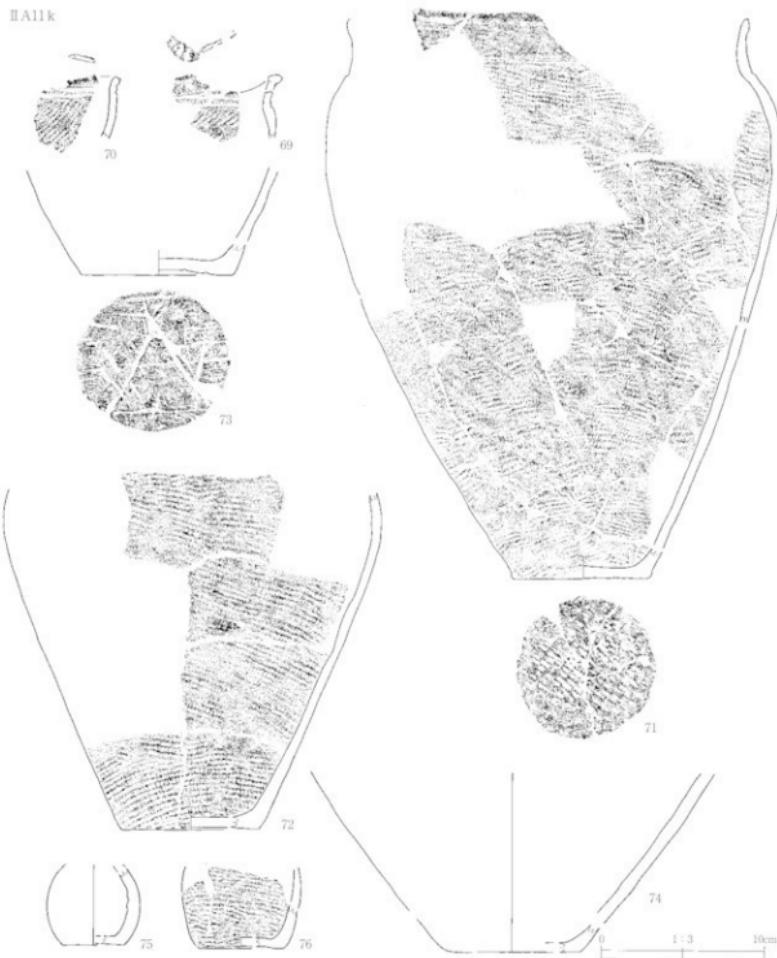


II A11k



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外観(施文など)	内面(調整など)	備考
60	II A11j Ⅲ層(下)・II A11j Ⅲ層	398.4	壹 扇形～窓1/2	ミガキ	ナデ	金賞母
61	II A11j Ⅲ層	135.4	壹 窓～底部破片	ミガキ	ナデ	
62	II A11k Ⅲ層	66.8	高坏、坏部破片	変形工字交叉部断り去り～粘土粒形成 ミガキ 牛 山形口縁部断面キザミ 口唇沈線、下半LH様	ミガキ	金賞母
63	II A11k Ⅲ層	26.1	高坏？ 破片	変形工字交叉部断り去り～粘土粒形成 ミガキ	ミガキ 内面保	金賞母
64	II A11j Ⅲ層 1/4・II A11k Ⅲ層 3/4	67.0	高坏？ 窓？ 口縁 脚破片	ミガキ 口唇沈線 山形口縁の断面にキザミ	ミガキ	金賞母
65	II A11k Ⅲ層	96.3	高坏 坏の底破片	ミガキ	ミガキ 环底面に浅緑の円形縫	金賞母
66	II A11k Ⅲ層	40.3	高坏 脚破片	ミガキ	ミガキ	金賞母
67	II A11k Ⅲ層	34.5	深鉢？ 口縁部破片	LH様 口縁ナデ 口唇沈線 底部最大径に保	ナデ 煙	金賞母
68	II A11k Ⅲ層	43.2	深鉢 口縁部破片	LH様 口縁ナデ	ナデ 輪積底	金賞母

第13図 繩文・弥生土器（5）



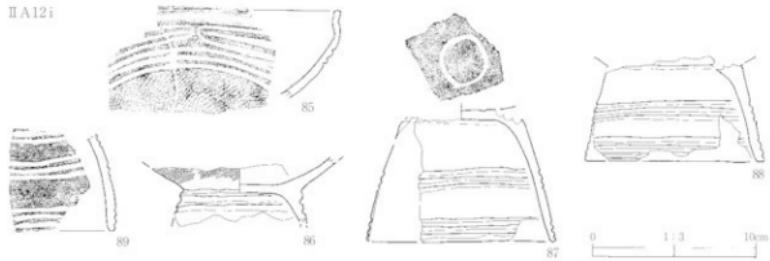
No.	位置・層位	重さ	説明・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
69	II A11k Ⅲ層	10.8	小形深鉢？ 口縁 破片	LR縦 口縁ナデ、刺突 口唇沈線、山形口縫 直削にキザル	ナデ、口縁ミガキ	金雲母 1038, 1029と同
70	II A11k Ⅲ層	8.7	小形深鉢？ 口縁 破片	LR縦、刺突、口唇沈線	ナデ、口縁ミガキ	1035, 1029と同一
71	II A11k Ⅲ層	87.3	深鉢 1/3	LR008 多条のナナメ～横 口縁部ナデ 脈部 下端裏面に煤	ナデ	金雲母
72	II A11k Ⅲ層	264.5	深鉢 脈部～底部 破片	LRナナメ	ナデ 脈部におこげ	金雲母
73	II A11k Ⅲ層	255.2	深鉢 週部	ナデ 木葉痕(笛?) 全体に煤	ナデ 脈部に煤	
74	II A11k Ⅲ層	250.6	壺 底部～底部破 片	ミガキ	ナデ	金雲母
75	II A11k Ⅲ層	36.2	ミニチュア 壺 口 縁を欠く 4.5	ミガキ	ナデ	接合しない破片あり
76	II A11k Ⅲ層 2/3・Ⅱ A11 Ⅲ層 1/2	47.9	壺 底部～底部 破片	LRナナメ	ナデ	

第14図 繩文・弥生土器 (6)

II A11

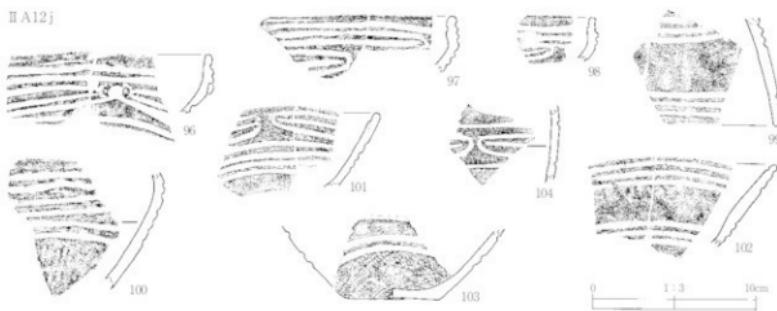
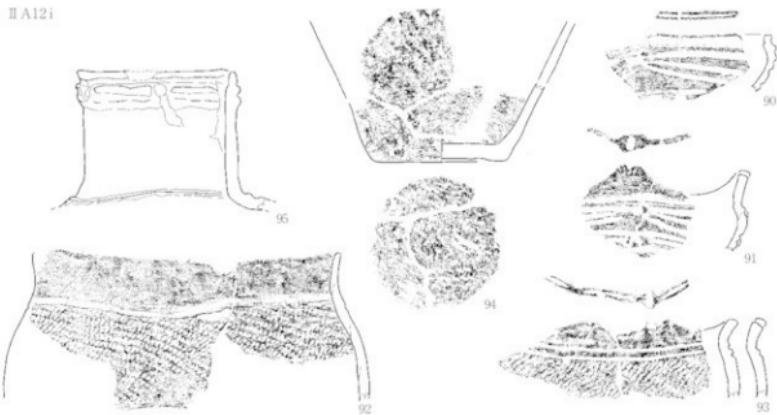


II A12



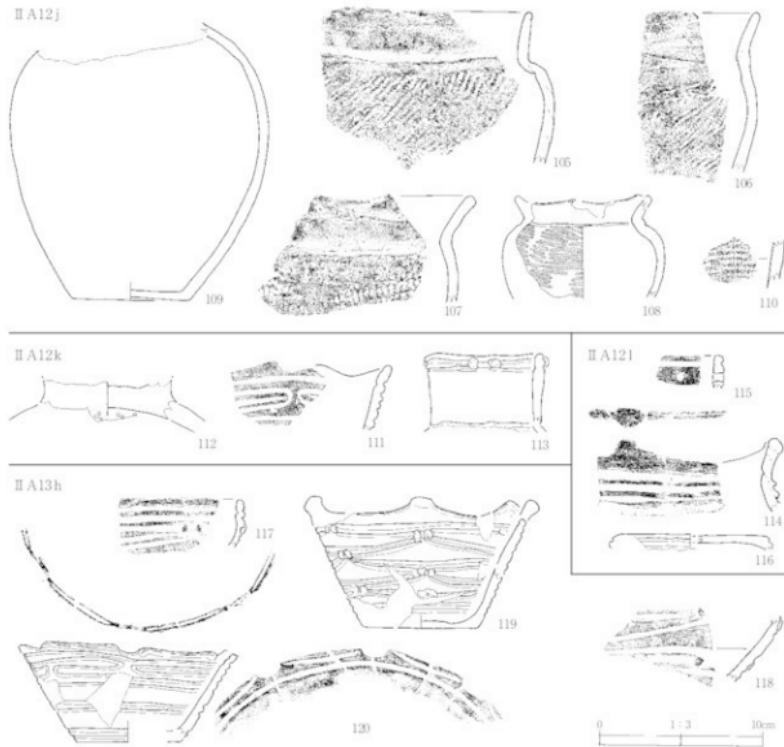
No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外観(拡大など)	内面(拡大など)	備考
77	II A11 Ⅲ層 5/6・Ⅲ A11K Ⅲ層 1/6	201.3	高环・坏部 ミガキ LRL?	ミガキ	地文に赤彩 金雲母 黒 褐色 3以上同一 次線、地文に赤彩が残る 金雲母 黒褐色 4Iと同	
78	II A11 Ⅲ層	120.2	高环・坏部破片 ミガキ LR横	ミガキ	ミガキ	
79	II A11 Ⅲ層	18.1	高环・口縁部破片 ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存	
80	II A11 Ⅲ層	58.9	高环・脚破片 ミガキ	ミガキ	金雲母	
81	II A11 Ⅲ層	31.0	高环・脚破片 ミガキ	ミガキ	金雲母	
82	II A11 Ⅲ層・Ⅱ層下限～ Ⅲ層上面	27.4	復縫・口縁～脚部 ミガキ 口唇沈線 波状口縁の底部にキザニ 下半?	ミガキ	外面上に赤彩残存	
83	II A11 Ⅲ層	193.6	深縫・口縁～脚部 LRナナメ 口唇に沈線	ナナメ	金雲母 佐理含む	
84	II A11 Ⅲ層	207.4	脚・つまみ～脚破 ナナメ 全体に僅	ナナメ	金雲母	
85	II A12 Ⅲ層(下)	40.2	高环・口縁破片 下半LR横 ミガキ	ミガキ	金雲母	
86	II A12 Ⅲ層(下)	138.2	高环・底～脚破片 LR横	ミガキ	金雲母	
87	II A12 Ⅲ層 4/7・Ⅲ A14(2.7+14)1/7 Ⅲ層	166.8	高环・脚 ミガキ	ミガキ 坏部周辺に浅 緑の円形線 ナナメ	金雲母	
88	II A12 Ⅲ層 2/5・Ⅲ A12 Ⅲ層(下) 2/5・Ⅲ A13 Ⅲ層 1/5	168.1	高环・脚 ミガキ 脚部下端に僅	ミガキ	僅 灰色との接合部 にも僅、ミガキ	
89	II A12 Ⅲ層	21.4	高环・脚破片 ミガキ	ミガキ		

第15図 繩文・弥生土器(7)



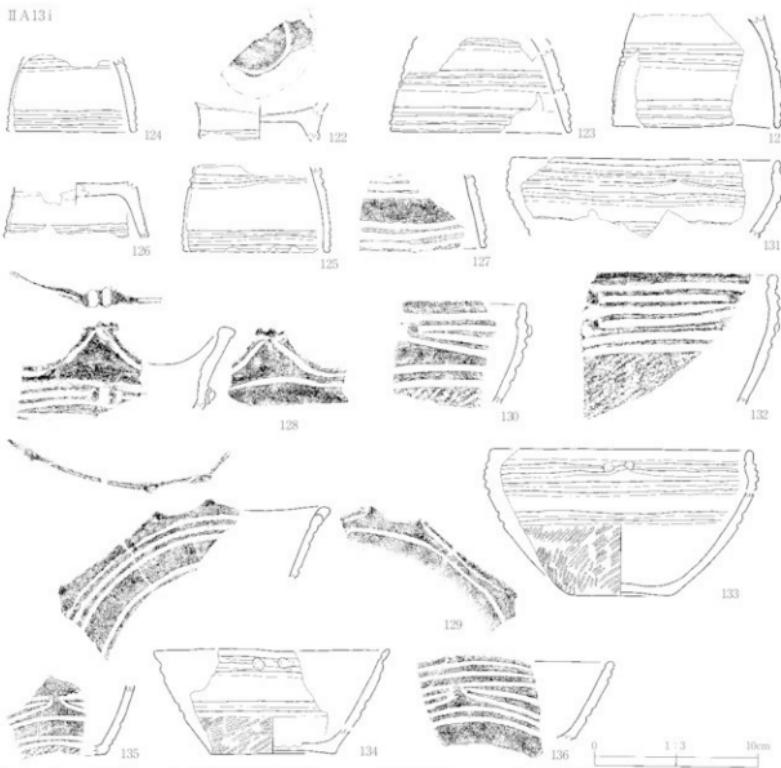
No.	位置・階位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調整など)	備考
90	II A12: Ⅲ層(下)	19.6	浅鉢? 口縁破片	変形文字交叉網目彫り入り→粘土粒形成?	ミガキ	
91	II A12: Ⅲ層(下)	20.1	浅鉢? 口縁部破片	変形文字交叉網目彫り去り→粘土粒形成 口 沿え縦 滝形口縁頂部キザミ	ミガキ	金雲母
92	II A12: Ⅲ層 2/5・II A14: Ⅲ層 3/5	165.1	深鉢 口縁~胴部 破片	LH横一口縁部ナデ	ナデ	砂粒少含む
93	II A12: Ⅲ層	56.6	深鉢 口縁部破片	LH横 口縁ミガキ 口唇沈堆 山形口縁頂部 キザミ おこげ	口縁ミガキ 脇崩ナ 子 保、おこげ	金雲母少量
94	II A12: Ⅲ層	374.9	深鉢 底部	地化あり 磨耗して原体不明	ナデ 脇の一部に こげ	金雲母少量
95	II A12: Ⅲ層(下) 3/6・II A13: 2/6-12, Ⅲ層 1/6	273.3	壺 口縁	ミガキ 隆起上に規則的な沈堆 次線の交差 部分が少しごり去り→かすかな粘土粒形成	ミガキ	金雲母
96	II A12: Ⅲ層・II A12: Ⅲ 層(下)	34.4	高杯 口縁部破片	変形文字交叉網目彫り去り→粘土粒形成 ミ ガキ	ミガキ	次線に赤彩残存
97	II A12: Ⅲ層(下)	29.0	高杯? 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
98	II A12: Ⅲ層	7.6	高杯 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	
99	II A12: Ⅲ層	33.6	高杯 網目破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 細砂含む
100	II A12: Ⅲ層(下)	33.9	浅鉢 脇崩破片	LH縦?	ナデ 口縁ミガキ	砂粒含む
101	II A12: Ⅲ層	27.9	浅鉢 口縁~胴部 破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
102	II A12: Ⅲ層 1/2・II A12: Ⅲ層 1/2	37.9	浅鉢 口縁~胴部 破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 滝縫内に赤彩少 量残存
103	II A12: Ⅲ層(下)	91.7	浅鉢 脇~底部破 片	LH横 文様地 ミガキ	ミガキ	金雲母
104	II A12: Ⅲ層	11.3	浅鉢 脇崩破片	ミガキ	ミガキ	赤彩

第16図 繩文・弥生土器 (8)



No.	位置・層位	大きさ	特徴・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
105	II A12 Ⅲ層(下)	96.2	深鉢 口縁～胴部 破片	LR縁 口縁ナデ	ナデ 煙	砂粒含む
106	II A12 Ⅲ層(下)	51.4	深鉢 口縁～胴部 破片	LR縁(0段多条)一口縫ナデ	ナデ	金雲母少量 砂粒含む
107	II A12 Ⅲ層(下)	63.8	深鉢 口縁部破片	LR縁?口縁ナデ 山形口縁	ナデ	砂粒含む
108	II A12 Ⅲ層(下)	41.0	小型深鉢 横破片 1/3	山形口縁部にキザミ、口唇沈線、口縁ナデ LRナデ?	ナデ	灰白色 外面に黒斑あり
109	II A12 Ⅲ層(下)	729.3	壺 口縁欠	丸方 壺外面に部分的にタール状付着物	ナデ	金雲母
110	II A12	8.4	鉢?壺?胴部破片	LR縁	ナデ	赤彩
111	II A12k Ⅲ層	14.0	浅鉢 口縁部破片	ミガキ 口唇に沈線	ミガキ	金雲母
112	II A12k Ⅲ層	191.7	壺 つまみ～草上 破片	ナデ	ナデ? 煙	細砂含みざらつく
113	II A12k Ⅲ層(下)	105.1	壺 口縁部	丸方字 工字交叉割り去り～粘土粒形成 と點付け 四字文3単位	ナデ	金雲母
114	II A12 Ⅲ層	30.0	鉢?口縁部破片	丸方 壺唇に沈線	ミガキ	
115	II A12 Ⅲ層	42	鉢?口縁部破片	丸方? 補修孔?(焼成前に見える)	ミガキ	沈縁内に赤彩残存
116	II A12 Ⅲ層	152	浅鉢?底部破片	ナデ	ナデ	沈縁に赤彩
117	II A13h Ⅲ層	13.5	高环 口縁部破片	変形工字交叉割り去り～粘土粒形成	ミガキ	金雲母
118	II A13h Ⅲ層	20.6	浅鉢? 脇部破片	変形工字交叉割り去り～粘土粒形成	ミガキ	金雲母
119	II A13h Ⅲ層 4/5・II A14h Ⅲ層 1/5	132.1	浅鉢 1/3	丸方 壺唇部貼り付け 口唇部沈線	ミガキに近いナデ	金雲母
120	II A10h 1/3・II A10h 1/5 Ⅲ層	96.2	浅鉢 2/5	丸方?に近いナデ	ナデ	金雲母

第17図 繩文・弥生土器（9）



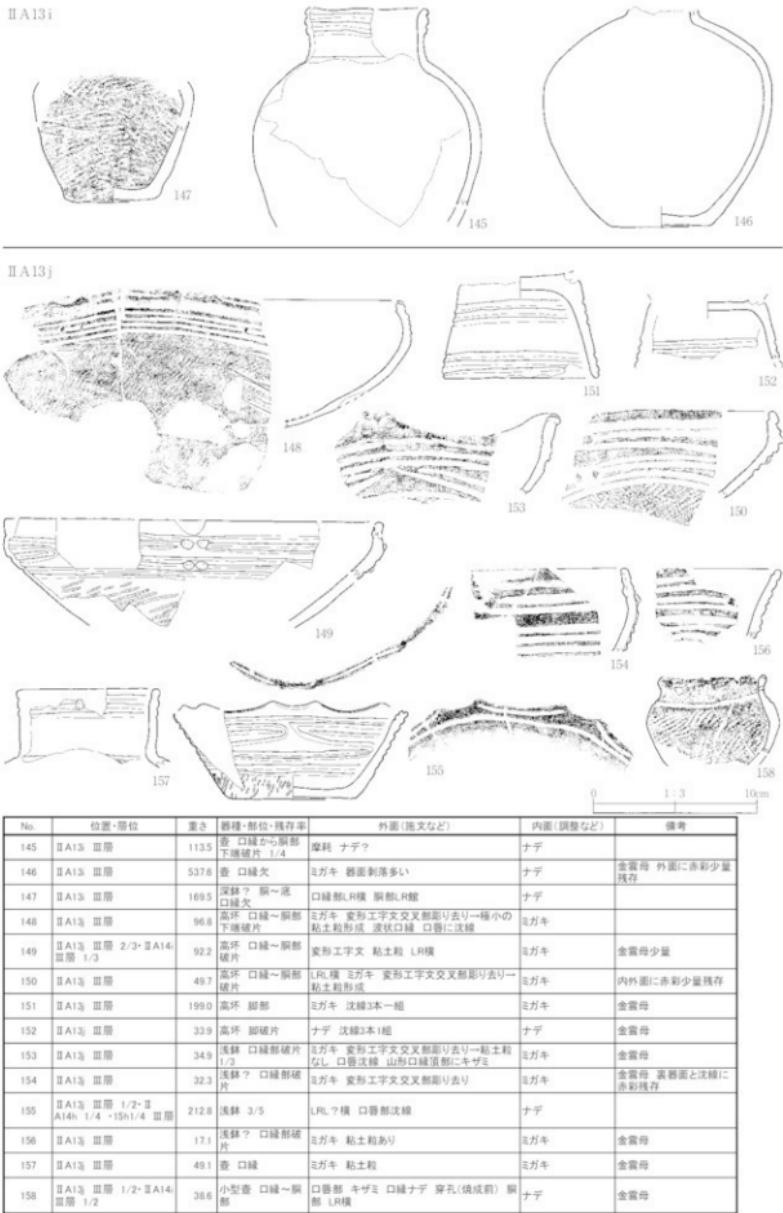
No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外側(施文など)	内側(調整など)	備考
121	II A13 Ⅲ層 Ⅱ層 1/3	96.8	高环 脚部 2/3	ナデ 沈縫3本組	ナデ	
122	II A13 Ⅲ層	32.3	高环 瓶底～脚破片	ミガキ	瓦窓沈縫の面線 ミガキ	金雲母
123	II A13 Ⅲ層	62.3	高环 脚部 1/2	ミガキ 上端に煤 沈縫3本組	ナデ	金雲母
124	II A13 Ⅲ層 1/2・Ⅲ A14n Ⅲ層 1/2	34.1	高环 脚破片	ミガキ	ミガキ	外側に赤彩少量残存
125	II A13 Ⅲ層 2/3・Ⅲ A14n Ⅲ層 1/3	35.5	高环 脚	ナデ? 摩耗あり	ナデ	金雲母 細砂含む
126	II A13 Ⅲ層	54.4	高环 脚破片	ナデ 沈縫3本組	ナデ	金雲母
127	II A13 Ⅲ層	20.2	高环 脚破片	ミガキ	ミガキ	沈縫内に積算少量残存
128	II A13 Ⅲ層	32.3	浅鉢? 口縁破片	変形工字文交叉割削り去り一粘土粒形成 口唇部沈縫 山形口縁頂部にキズミ	ミガキ	金雲母少量 沈縫中に赤彩少量化心
129	II A13 Ⅲ層	37.0	浅鉢 口縁部破片	ミガキ 口唇に次線	ミガキ	金雲母
130	II A13 Ⅲ層	31.8	浅鉢 破片	ミガキ LR縫	ミガキ	金雲母 沈縫内赤彩残存 1068と同一?
131	II A13 Ⅲ層	53.3	鉢? 破片	ミガキ 変形工字文交叉割削り去り 粘土粒なし	ミガキ	
132	II A13 Ⅲ層	62.9	浅鉢 破片	変形工字文交叉割削り去り一粘土粒形成 ミガキ LR縫	ミガキ	金雲母 沈縫内赤彩残存 1070と同一?
133	II A13 Ⅲ層 4/5・II A13 Ⅲ層 1/5	211.1	浅鉢 1/2	LR縫	ミガキ 口縁部に煤	
134	II A13 Ⅲ層	81.9	浅鉢 口縁～底部 破片 1/4	ミガキ 変形工字文交叉割削り去り 粘土粒 LR縫	ミガキ	金雲母
135	II A13 Ⅲ層	154.4	浅鉢 瓶～底部破片	ミガキ 下端LR縫	ミガキ	金雲母 沈縫内赤彩少量化少しおよび粘土粒
136	II A13 Ⅲ層	35.6	浅鉢 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 外側に赤彩少量残存

第18図 繩文・弥生土器 (10)

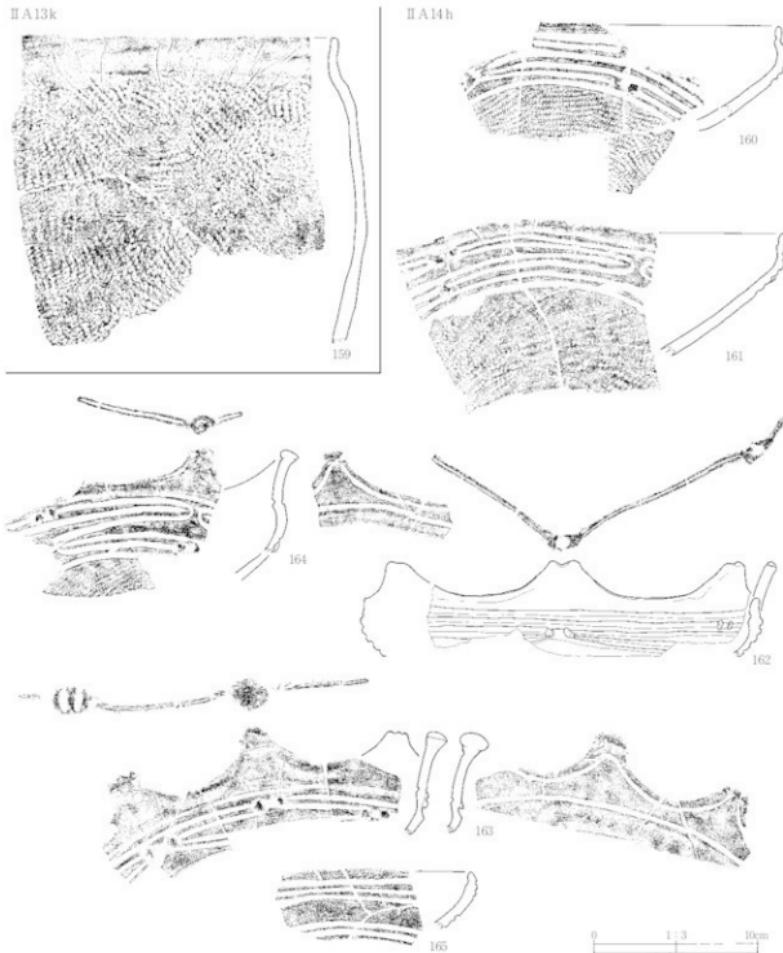


No.	位置・層位	重さ	種類・部位・残存率	外観(描文など)	内面(調査など)	備考
137	II A13 Ⅲ層	282	深鉢 口縁～胴部 破片	波方キ	ミガキ	金賞母 器面に赤彩少量
138	II A13 Ⅲ層	130.6	深鉢 口縁破片	LR横 口縁ナデ	ナデ 輪積底	金賞母
139	II A13 Ⅲ層 1/4・II A13 Ⅲ層 3/4	114.0	深鉢 口縁～胴部 破片	LR横 口縁ヒガキ 口唇沈線	ナデ 輪積底 口縁 ミガキ	金賞母
140	II A13 Ⅲ層	33.0	深鉢 口縁部破片	LR横～口縁部ヒガキ 山形口縁の底部キザミ 口唇立模	ミガキ	両面ともおこげ
141	II A13 Ⅲ層 1/4・II A14 Ⅲ層 3/4	115.1	深鉢 口縁～胴部 破片	LR横 口縁部ヒガキ 沈線に様	ミガキ 輪積底 煙 残存	金賞母 地紋に赤彩少し
142	II A13 Ⅲ層 1/2・II A14 1/4 Ⅲ層	1,147.0	深鉢 4/5	LR横～口縁部ナデ 脇部下半を斜き煤、おこげ	ナデ 脇部と胴部下 端を斜きおこげ	金
143	II A13 Ⅲ層 1/4・II A13・13・14・14・15 Ⅲ 層 改めて3/4	276.8	小形 深鉢 3/4	LRナナメ 口縁部ナデ 波状口縁 煙、おこ げ	ナデ	金賞母
144	II A13 Ⅲ層 定期	89.6	ミニチュア 鉢 瞬	ナデ 輪積底残る	ナデ 輪積底残る	側面 欠け口に赤彩残存 赤色顔料容器か

第19図 繪文・弥生土器 (11)

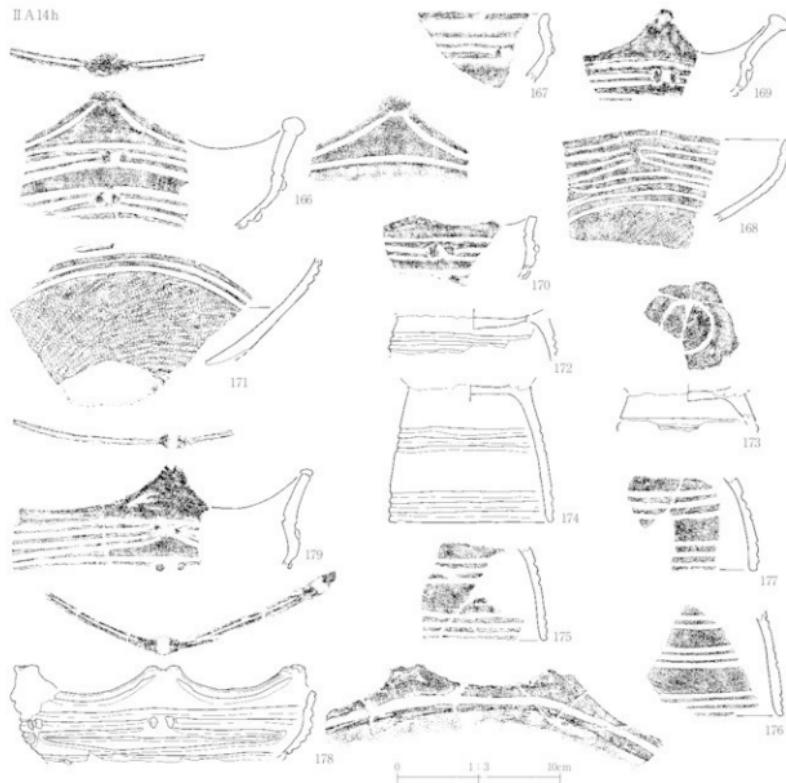


第20図 織文・弥生土器 (12)



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外観(施文など)	内面(施文など)	備考
159	II A13k III層	311.5	深鉢 口縁から削 鉢破片	LR縞……部ナメ 口縁ナメ	ナメ 煙 おこげ 金雲母	金雲母 クリスル
160	II A14h III層	87.4	高杯 壁部破片	ミガキ 変形工字文交叉割り去り一粘土粒 形成 LRナメ	ミガキ	金雲母
161	II A14h III層 1/2 - II A14	128.5	高杯?浅鉢?口縁 ～底部下端破片	ミガキ LR縞 粘土粒貼り付け	ミガキ	赤彩少量残存
162	II A14h III層	95.2	高杯?口縁破片	変形工字文交叉割り若干削り去り 口唇次縞、 山形口縁頂部にキザミ 三脚	ミガキ 煙	金雲母
163	II A14h III層	81.5	高杯?口縁破片	ミガキ 変形工字文交叉割り去り一粘土粒 貼り付け 口唇次縞 山形口縁頂部キザミ	ミガキ	金雲母 赤彩残存
164	II A14h III層	59.7	高杯 口縁破片	ミガキ 変形工字文交叉割り去り一粘土粒 貼り付け 口唇次縞	ミガキ	金雲母
165	II A14h III層	32.5	高杯 口縁破片	ミガキ	ミガキ	赤彩少量残存

第21図 繪文・弥生土器 (13)



No.	位置・層位	重さ	種類・部位・残存率	外観(施文など)	内面(調整など)	備考
166	II A14h: Ⅲ層 1/2 - II A14: Ⅲ層 1/2	58.1	高环、环部破片	三万牛 形変工字文交叉部割り去り一粘土粒形成 口唇沈線 LR模	ミガキ	金雲母
167	II A14h: Ⅲ層	17.9	高环、口縁部破片	三万牛 形変工字文交叉部割り去り一粘土粒形成	ミガキ	金雲母
168	II A14h: Ⅲ層	42.6	高环、环部破片	三万牛 LR模	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存 細炒きすこしさらづく
169	II A14h: Ⅲ層	110.8	高环? 口縁部破片	三万牛 形変工字文の交叉部の割り去り一粘土粒形成	ミガキ	金雲母
170	II A14h: Ⅲ層	20.2	高环? 口縁部破片	三万牛 形変工字文の交叉部の割り去りなし 粘土粒貼り付け	ミガキ	金雲母
171	II A14h: Ⅲ層	99.6	高环、脚部破片	ミガキ LR模 煤	ミガキ	赤彩少量残存
172	II A14h: Ⅲ層	80.5	高环 底-脚破片	三万牛 底部に煤、脚接合部にも煤	ミガキ	金雲母
173	II A14h: Ⅲ層	87.3	高环 脚	三万牛 全体に煤、脚接合部にも煤	ミガキ	金雲母 底面に沈線 円形縫
174	II A14h: Ⅲ層	298.8	高环 脚	ミガキ?	ミガキ?	金雲母 器面と沈線に赤 彩残存
175	II A14h: Ⅲ層	23.0	高环、脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
176	II A14h: Ⅲ層	27.1	高环、脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩少し残存
177	II A14h: Ⅲ層	21.3	高环、脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
178	II A14h: Ⅲ層 7/10 - II A13: Ⅲ層 2/10 - II A12: Ⅲ層下位 - 1/10	124.0	浅鉢 口縁部破片	三万牛 形変工字文交叉部割り去り一粘土粒形成 口唇沈線 山形突起の底削にキザミ	口唇ナデ、环部ケズ 沈線 山形突起の頂部キザミ	金雲母 赤彩ないナデ 模様?
179	II A14h: Ⅲ層	49.6	鉢? 破片	ミガキ	ミガキ	内外全体に煤

第22図 織文・弥生土器 (14)

II A14h



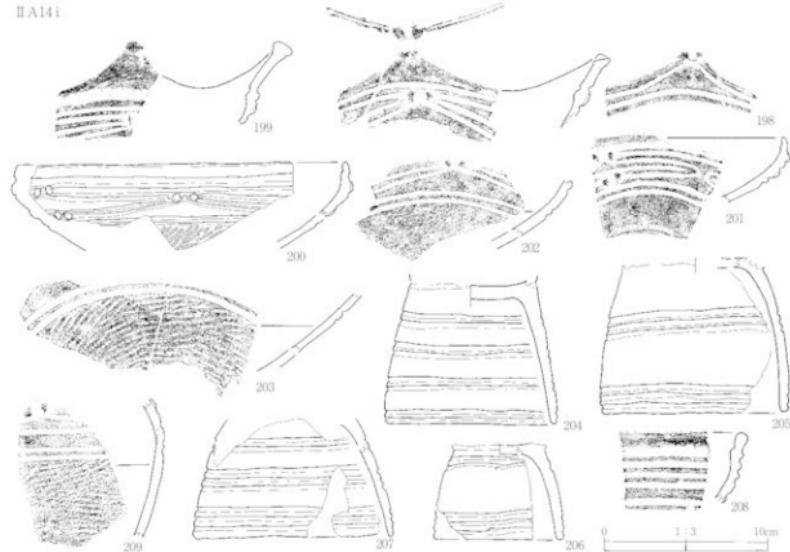
No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外側(拡大など)	内側(調査など)	備考
180	II A14h: Ⅲ層	80.3	鉢 口縁～胴部破片	三万キ 变形工字交叉部刷り去り一粘土粒形成 LR横	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
181	II A14h: Ⅲ層	25.2	鉢? 口縁部破片	三万キ 变形工字交叉部刷り去り一かすかな粘土粒形成 LR横?	ミガキ	金雲母
182	II A14h: Ⅲ層	24.8	鉢 口縁部破片	三万キ 变形工字交叉部刷り去り?	ミガキ	金雲母
183	II A14h: Ⅲ層	43.7	鉢 口縁部破片	三万キ LR横?	ミガキ	金雲母
184	II A14h: Ⅲ層 1/2 - Ⅱ A16: Ⅲ層 1/4 - Ⅱ A15: Ⅲ層 上面～Ⅲ層 1/4	146.8	浅鉢 2/5	三万キ 变形工字交叉部少し刷り去り一粘土粒形成 LR横?	ミガキ	金雲母少量
185	II A14h: Ⅲ層	11.9	浅鉢 口縁部破片	三万キ	ミガキ	金雲母 沈線に赤彩少量残存
186	II A14h: Ⅲ層	21.1	浅鉢 口縁～胴部	三万キ	ミガキ	金雲母 沈線に赤彩少量残存
187	II A14h: Ⅲ層 6/7 - 北西側Ⅲ層 1/7	514.1	深鉢 4/5	LR横一少しナデ、口縁部ミガキ 部分的に煤、おこげ	ミガキ 内面逆以外は煤	
188	II A14h: Ⅲ層	85.9	深鉢 口縁部破片	LR横 口縁ミガキ	ミガキ	金雲母
189	II A14h: Ⅲ層	267.3	深鉢 口縁～胴部	底面2種混合セ ナナメ 口縁ナデ 煤	ナデ 煤	金雲母 秒粒含む
190	II A14h: Ⅲ層	196.1	小形深鉢 1/2	LR横 LR横? 横 口縁部ナデ	ナデ 煤	
191	II A14h: Ⅲ層	118.6	小形深鉢 3/4	上半LR横 下半LRナナメ	ナデ	
192	II A14h: Ⅲ層	72.9	壺 口縁～胴部	ミガキ	ナデ	金雲母
193	II A14h: Ⅲ層	38.7	壺 口縁部	ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩残存 細砂含む

第23図 繩文・弥生土器 (15)

II A14h



II A14i



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
194	II A14n Ⅲ層	16.5	壺 口縁破片	ナデ	ナデ	
195	II A14n Ⅲ層	34.2	壺 口縁～脇部破片	ミガキ 变形工字文交叉割り去り～粘土粒形成	ミガキ 脇部オサエ 金雲母 赤彩残存	
196	II A14n Ⅲ層	40.2	壺 脇部破片	ミガキ	ミガキ	
197	II A14n Ⅲ層	234.3	壺 口部の一割多欠く熟完形	ミガキ	ナデ	沈緑内に赤彩
198	II A14 Ⅲ層	29.3	高环 口縁部破片	ミガキ 变形口縁破片 形成 口縁波線 山形口縁直角キザシ	ミガキ	金雲母
199	II A14 Ⅲ層	20.2	高环?	ミガキ 变形工字文交叉割り去り～粘土粒形成	ミガキ	黒褐色
200	II A14 Ⅲ層	84.0	高环 环口縁～脇部破片	ミガキ 变形工字文交叉割り去り～粘土粒形成 LR横	ミガキ	赤彩少量残存
201	II A14 Ⅲ層	31.2	高环 口縁部破片	ミガキ 变形工字文交叉割り去り～粘土粒形成	ミガキ	沈緑内に赤彩?
202	II A14 Ⅲ層	38.1	高环 脇部破片	LR横 ミガキ 粘土粒貼り付け	ミガキ	金雲母
203	II A14 Ⅲ層	57.0	高环 脇部破片	LR横 ミガキ	ミガキ	金雲母
204	II A14 Ⅲ層	287.3	高环 脚	ミガキ 沈緑2本紐	ミガキ	金雲母
205	II A14 Ⅲ層	132.1	高环 脚 1/2	ミガキ 沈緑3本紐	ミガキ	金雲母
206	II A14 Ⅲ層	46.9	高环 脚	ミガキ	ミガキ	金雲母
207	II A14 Ⅲ層	96.1	高环 脚 1/2	ナデ? 摩耗あり 沈緑2本相	ナデ? 煤	金雲母少量
208	II A14 Ⅲ層	26.1	浅鉢?	ミガキ 变形工字文交叉割り去り～粘土粒形成	ミガキ	沈緑内に赤彩? 残存
209	II A14 Ⅲ層	40.2	鉢 脇部破片	ミガキ 变形工字文交叉割り去り～粘土粒形成～ナメ	ナデ	金雲母

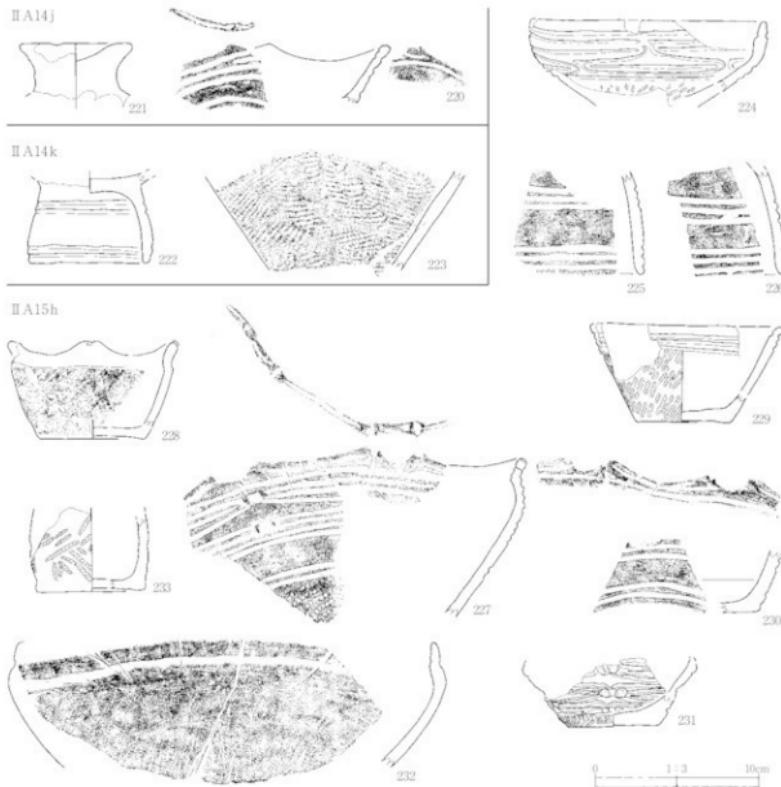
第24図 織文・弥生土器 (16)

II A14i



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外観(施文など)	内面(調整など)	備考
210	II A14: III層	49	小形鉢? 口縁~胴部 側面破片	ミガキ	ナデ	
211	II A14: III層	143.8	深鉢 口縁~胴部 破片	LRナナメ 口縁部ミガキ 山形口縁頂部にキ ザミ 口縁部におこげ	ナデ おこげべつと ざらつく	金雲母 細砂含みすこし ざらつく
212	II A14: III層	151.6	深テヌ鉢 口縁~胴部 側面破片	LR横 口縁ミガキ	ミガキ	金雲母 粒含みざらつく
213	II A14: III層 3/5・II A13: 1/5+14n: 1/5 III層	1875	深鉢 口縁から腹 部上半破片	上端LR横→口縫割正方孔 中柱一部LRタテ 2~3枚の波状口縁の突起頂部にキザミ 全 体に保	口縫割ミガキ、胴部 ナデ 口縫割跡き保	金雲母
214	II A14: III層 3/5・II A14n: III層 2/5	264.7	小形深鉢 底部を 欠く 4/5	LR横 口縫割ミガキ 全体に保。おこげ	ナデ 口縫割ミガキ おこげ全体に	金雲母 細砂含みすこし ざらつく
215	II A14: III層	306.6	深鉢 口縁~胴部 破片	LRナナメ+複 口縫ナデ 上半おこげ	ナデ 保	金雲母 細砂含みすこし ざらつく
216	II A14: III層	229.0	深鉢 口縁~胴部 破片	LR横 口縫ナデ	ナデ	金雲母 粒含む
217	II A14: III層	256.8	壺 略完形	ナデ	ナデ 周縁に保	
218	II A14: III層 5/6・II A14n: III層 1/6	530.0	壺 上半	ミガキ 口縫幾帯に新規的な波状	口縫部ミガキ、胴部 ナデ	外面に赤彩ごく少量残る
219	II A14: III層	812.2	壺 口縁~胴部破 片	口縫部ミガキ LR横 口縫次線2~3本ラフ	ナデ	砂粒含む

第25図 繩文・弥生土器 (17)



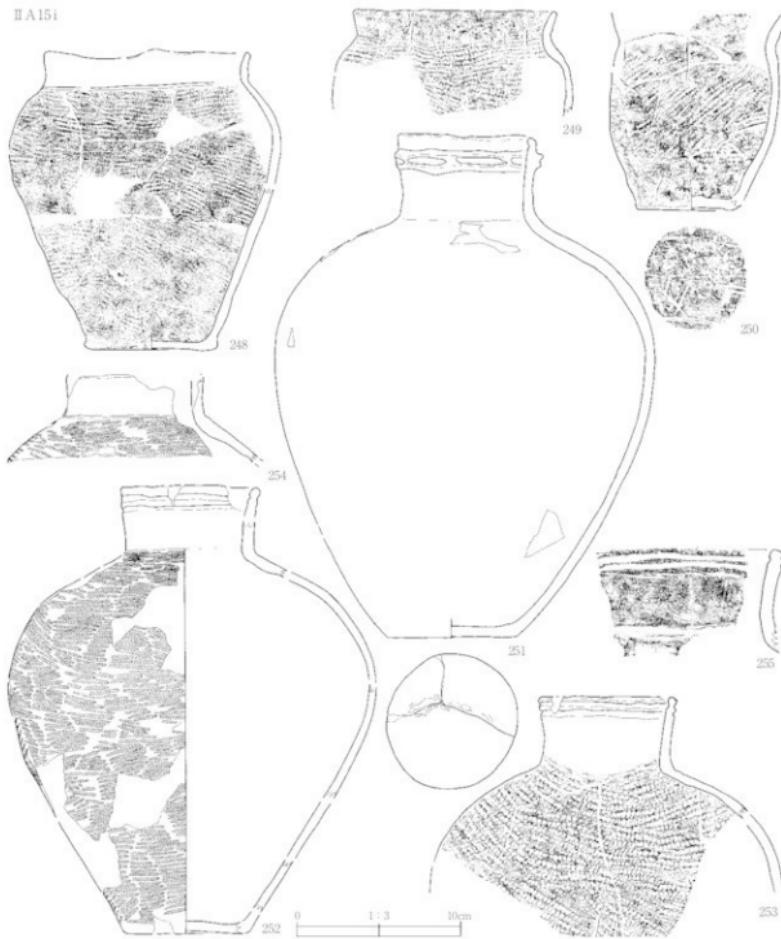
No.	位置・層位	大きさ	種類・部位・残存率	外面(描文など)	内部(調査など)	備考
220	II A14 Ⅲ層	15.3	鉢 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩残存
221	II A14 Ⅲ層	151.1	蓋 つまみ	ナデ		金雲母
222	II A14c Ⅲ層	131.0	高环 脚	ミガキ 沈縫2本組	ミガキ	金雲母
223	II A14c Ⅲ層	132.2	深鉢 膜部破片	LHR縫 線模様直線模様	ナデ	
224	II A15h Ⅲ層	79.8	高环 环部 1/3	下半LHR縫 ミガキ	ミガキ	
225	II A15h Ⅲ層	25.5	高环 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
226	II A15h Ⅲ層	22.3	高环 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 沈縫内に赤彩残存
227	II A15h Ⅲ層	95.1	浅鉢 口縁～胴部 破片	LHR縫 ミガキ 変形工字交叉部取り去り一粘土剝形成	ミガキ	沈縫内に赤彩残存
228	II A15h Ⅲ層	63.3	小形鉢 1/3	脚部LHR縫 口縁ミガキ 山形口縁直部にキザミ	ミガキ	金雲母少量 直部のキザミ、沈縫に赤彩少量残存
229	II A15h Ⅲ層	100.4	浅鉢 1/3	LHR縫	ミガキ	金雲母少量
230	II A15h Ⅲ層	33.2	浅鉢 脇部～底部 破片	ミガキ	ミガキ	金雲母
231	II A15h Ⅲ層	91.7	浅鉢 口縁～胴部 破片	変形工字交叉部取り去り一粘土剝形成 粘土剝がり付ける	ナデ	金雲母
232	II A15h Ⅲ層	131.4	小形深鉢 破片	LHR縫 口縁ナデ	ミガキ 次縫くずれ	金雲母少量
233	II A15h Ⅲ層	51.8	小形深鉢 蓋	LHR縫 視	ナデ	金雲母

第26図 繪文・弥生土器 (18)



No.	位置・階層	重さ	種類・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
234	II A15h Ⅲ層	40.9	壺 口縁破片	ミガキ 変形工字交叉部粘土貼り付け	ナデ、ミガキ	沈緑に赤彩残存
235	II A15h Ⅲ層	170.2	壺 口縁～胴部上 理 口唇を欠く	ミガキ	ナデ 口縁部ミガキ	金雲母
236	II A15h Ⅲ層	20.6	壺 口縁部破片	ミガキ 四字交叉部剥り去りー小さい粘土 粒形成	ミガキ	沈緑に赤彩残存
237	II A15i Ⅲ層	20.2	高杯 口縁部破片	ミガキ 煤、おこげ	ミガキ 煤、おこげ	金雲母
238	II A15i Ⅲ層	34.4	高杯 脚破片	ミガキ 沈緑3本紐	ミガキ	金雲母
239	II A15i Ⅲ層	34.9	高杯 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 内面に赤彩少量 残存
240	II A15i Ⅲ層	24.0	高杯 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母少量 赤彩少量残存
241	II A15i Ⅲ層	50.6	浅鉢 口縁～胴部 破片	LR縫 ミガキ	ミガキ	金雲母
242	II A15i Ⅲ層	47.8	浅鉢 口縁部から 底部破片	LR縫 ミガキ 変形工字文少し剥り去りー粘土 粒形成	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
243	II A15i Ⅲ層	28.1	浅鉢 口縁～胴部 破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
244	II A15i Ⅲ層	29.0	林 口縁部～胴部 破片	LR縫 (段多柔？) ミガキ	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
245	II A15i Ⅲ層	459.5	深鉢 1/2	LRナメーナデ？ 摩耗して見えず	ナデ 輪積痕明確	金雲母 シラカバ含む
246	II A15i Ⅲ層	93.4	深鉢 口縁部破片	LRナメ 口縁部ナデ	ナデ 煤	砂粒含む
247	II A15i Ⅲ層	817.4	深鉢 脚下半～底 部	LRタテー一部ナデ	ナデ	金雲母

第27図 織文・弥生土器 (19)



No.	位置・層位	裏さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
248	II A15 Ⅲ層	436.9	深鉢3/4	下半Rc横 上半Rcナメ 外面一部に保、おこげ	ナデ 上半に保、おこげ	金雲母
249	II A15 Ⅲ層	70.6	深鉢 口縁～胴上半破片	LRナメ	ナデ	金雲母
250	II A15 Ⅲ層	227.4	小形 深鉢 1/2	LR縁 口縁部ナデ 底部終焉と胴部下半に保	ナデ	
251	II A15 Ⅲ層	2.093.1	壺 完形	ミガキ 口縁の隆帯上に断続した沈線	口縁ミガキ、胴ナデ	金雲母
252	II A15 Ⅲ層・II 層下位～Ⅲ層上面・Ⅲ層様出中	1.058.0	壺 2/3	LRナメ～横 口縁ミガキ 口縁部沈線2本組	口縁ミガキ、胴ナデ	金雲母
253	II A15 Ⅲ層	361.5	壺 上半	口縁部ミガキ LRナナメ 口縁部沈線2本組	口縁部ミガキ、胴部ナデ 脊柱底	金雲母 地文に赤彩残る
254	II A15 Ⅲ層	99.2	壺 口縁～胴部破片	口縁 ミガキ、胴 LRナナメ	ナデ	金雲母
255	II A15 Ⅲ層	63.8	壺 口縁部破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 細砂含みすこしざらづ

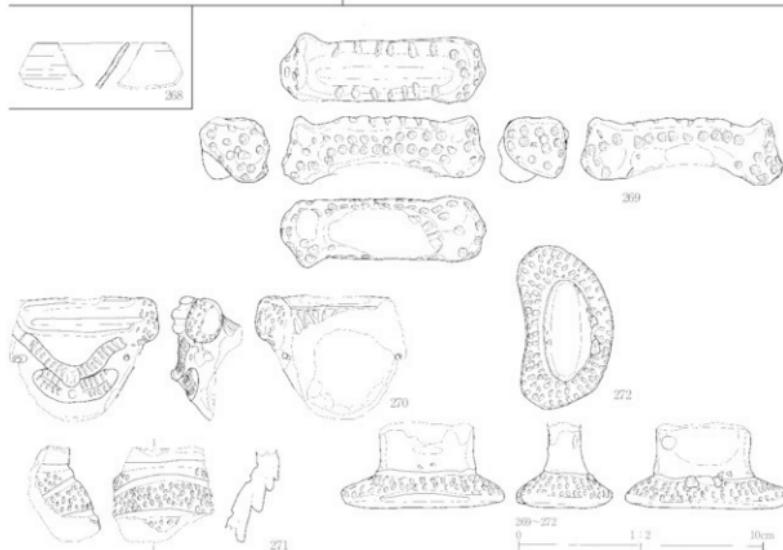
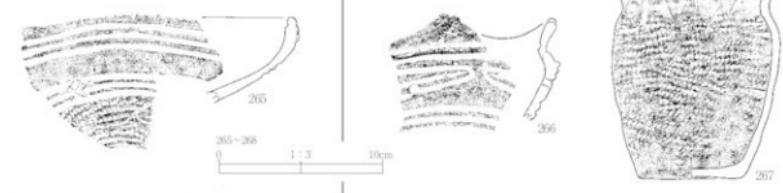
第28図 繪文・弥生土器 (20)



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
256	II A15 Ⅲ層 Ⅲ層 2/3	62.1	高环? 口縁部破片	ミガキ 变形工字文交叉部割り去り→粘土粒形成	ミガキ	金雲母 赤彩少量残存
257	II A15 Ⅲ層	223.2	高环 脚	ミガキ 汎縁3本組	ミガキ	金雲母
258	II A15 Ⅲ層 浅鉢 略完形	260.4	変形工字文交叉部割り去り→粘土和貼り付け 山形口縁にキザミ、口唇に沈線、脚部下端LH様	ミガキ	金雲母	
259	II A16 Ⅲ層	56.3	高环 脚破片	ミガキ	ミガキ	金雲母 内面に赤彩少量残存
260	II A16 Ⅲ層	90.1	深鉢 口縁~胴部 RL縁 山形口縁 口唇に沈線、頭部を跡き煤べつとり	ミガキ 下端に煤	ミガキ	金雲母
261	II A15, Ⅲ層 1/3・II A16, Ⅲ層 2/3	42.4	壺 口縁部	ミガキ	ミガキ	
262	Ⅲ層下位~Ⅲ層上面	12.8	浅鉢 口縁部破片 貼り付け	ミガキ 变形工字文交叉部割り去り 粘土粒	ミガキ	細砂含み少しざらつく 沈線内に赤彩残存
263	Ⅲ層下位~Ⅲ層上面	246.5	壺 破片	RL 煙 ナデ おこげ	ミガキ	金雲母
264	Ⅲ層検出中	41.0	深鉢 口縁~胴部 LR縁 口縁ミガキ 口唇に沈線 口縁部煤べつとり	ミガキ おこげべつとり	ミガキ	

第29図 繰文・弥生土器 (21)

## 歯間状遺構埋土



No.	位置・層位	重さ	器種・部位・残存率	外面(施文など)	内面(調査など)	備考
265	歯間状遺構理土一括	59.4	高杯 口縁部破片	上半ミガキ 下半LR模	ミガキ	金雲母
266	東壁トレンチ III層	42.2	高杯 口縁部破片	主ガキ 山形口縁部にキザミ 植修孔1	ミガキ	金雲母
267	東壁トレンチ III層	315.7	深鉢 路突形	LRナメ 口縁ナデ 部分的におこげ	ナデ、底部を脱け様	

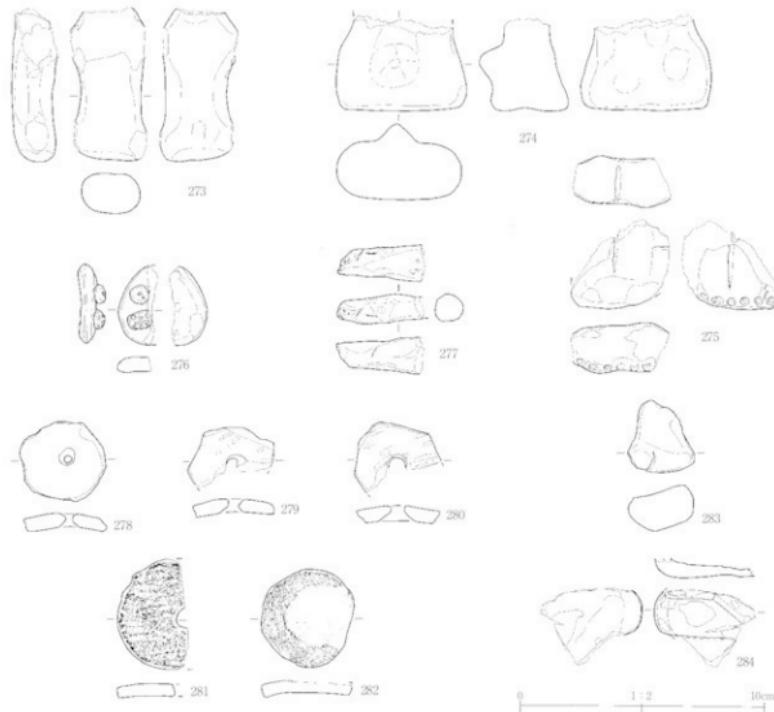
立花南遺跡須恵器観察表

No.	位置・層位	器種・部位	重さ	長さ	厚さ	外面調整	内面調整	備考
268	東壁トレンチIII層	杯 口縁部破片	5.1 [2.8]	クロコナデ		ロクロナデ		

立花南遺跡土製品観察表

No.	位置・層位	種類	重さ(g)	長さ(cm)	厚さ(cm)	残存状況(部位・割れ口ほか)	つくり(製法)	外面(文様・その他)	付着物	備考	
269	II A1b III層	土偶 (絞型)	52.6	2.7	8.3	2.8	頭部結晶部分	中実	側面刺突、上面凹み、割れ目	赤残存	弥生時代
270	II A11k III層	土偶 (絞型)	43.1	(5.1)	(6.1)	(2.9)	腹面のみ 後は粘土接着面から剥離	中空	側面刺突、割れ目、側面に赤	赤残存	弥生時代
271	II A15h III層	土偶	21.4	(3.9)	(2.9)	(4.1)	腹部分	中空 内面輪積み	沈線、刺突		弥生時代
272	II A12j III層(下)	土偶	52.9	(3.5)	3.9	6.7	足?	中実板状 刺突文	赤残存	赤残存 (結晶・刺突の合体)	

第30図 織文・弥生土器 (22)、須恵器、土製品 (1)

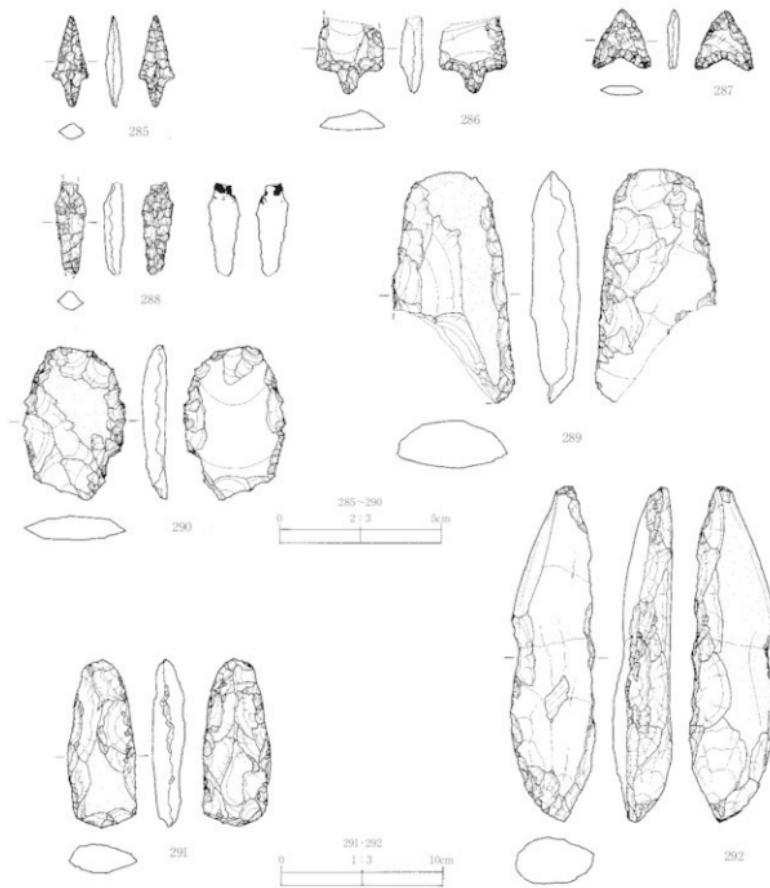


No.	位置・層位	種類	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存状況(部位・削れ口ほか)	つくり(製作法)	外面(文様・その他)	付着物	備考
273	II A11h Ⅲ層	土偶	41.1	(6.3)	(3.2)	1.8	上端、左右側、左 右下端欠	中実	一部にハケメ状調 整底みられる	赤々ごく少 量	弥生時代
274	II A15i Ⅲ層	土偶	66	(3.1)	5.4	3.6	下半部	中実	頭?突起	赤彩	弥生時代
275	II A15h Ⅲ層	土偶	24.8	(3.7)	(4.0)	(2.1)	下半部破片	中実	表 正中線、裏 正中線、下端に剥 離	赤彩	弥生時代
276	II A13g Ⅲ層	土偶	35.6	3.3	(1.6)	1.2	頭?	中実	目と眉の表現?		
277	II A13i Ⅲ層	不明	5.3	(2.6)	1.5	1.6		中実			

No.	位置・層位	種類	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存状況	周縁の加工	穿孔	付着物	土器の状況
278	II A12k Ⅲ層	円盤状 (穿孔)	7.3	3.3	3.5	0.7	完形	一部を除 き研磨	穴はなめらか 裏 から	赤残存	ミガキ
279	II A13j Ⅲ層	円盤状 (穿孔)	4.4	(2.4)	3.5	0.7	1/2	未加工	穴はなめらか 裏 から		LR摩耗
280	II A14h Ⅲ層	円盤状 (穿孔)	4.9	(2.9)	3.5	0.7	3/5	未加工	穴はなめらか 裏 から?	赤少量	LR摩耗
281	II A14h Ⅲ層	円盤状 (穿孔)	7.3	(2.9)	4.0	0.6	3/5	研磨	穴はなめらか	赤褐色少量	LR?摩耗
282	II A14h Ⅲ層	円盤状	9.3	4.0	3.8	0.7	完形	表面剥落あ り		赤褐色少量	不明 摩耗

No.	位置・層位	種類	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存状況	つくり(製作法)等	備考
283	II A14h Ⅲ層	粘土塊	9.8	3.0	2.7	1.9	完形	てびねり 不整形	
284	南端埋土	土人形?	5.9	(3.2)	(4.1)	0.8	破片	表面沈継、裏面指オサエ 型起こし?	外面黒色 近世以降

第31図 土製品(2)



立花南遺跡石器観察表

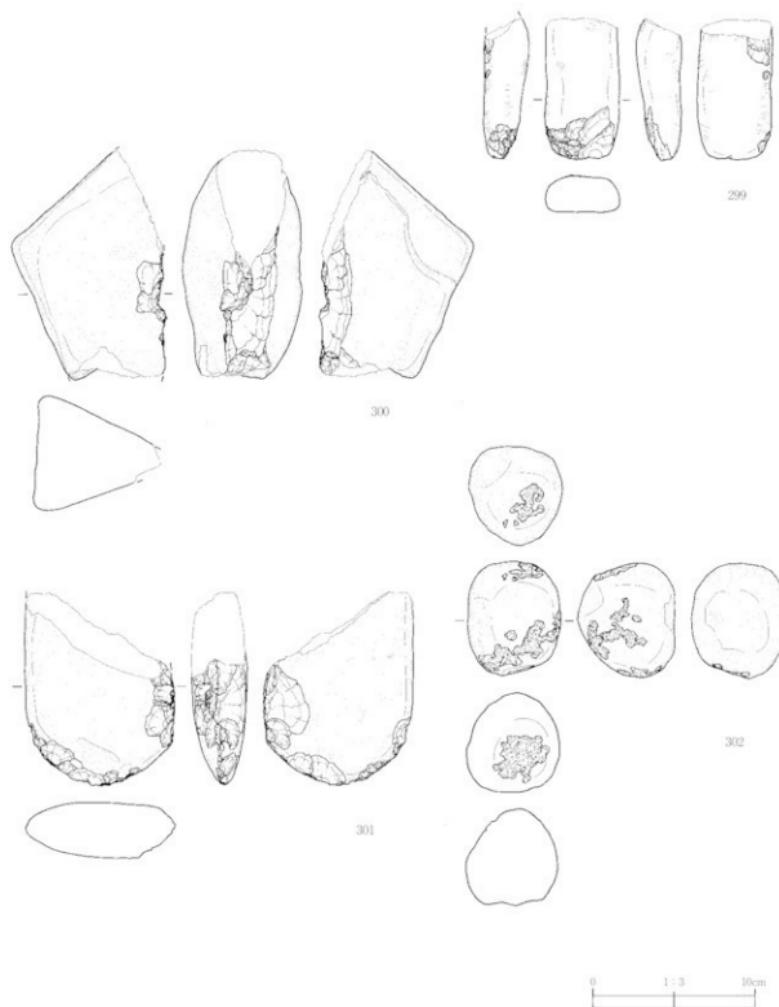
	位置・層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質・产地	残存状況	その他	備考
285	Ⅲ A4h Ⅲ層	石器	Ⅲ Aa	2.8	1.1	0.6	0.8	頁岩 北上山地 古生代	完形		
286	Ⅲ A4h Ⅲ層	石器	Ⅲ Ab	(2.4)	2.1	0.7	2.6	頁岩 北上山地 古生代	上半欠損 3/5残		
287	Ⅲ A16 Ⅲ層	石器	Ⅲ Ba	1.8	1.8	0.4	0.9	頁岩 北上山地 古生代			
288	Ⅲ A14h Ⅲ層	石器？	I a	2.9	1.0	0.6	1.4	頁岩 北上山地 古生代	先端薄い 先端と基部欠損 基部にアスファルト 石器？		
289	Ⅲ A15h Ⅲ層	石器		(7.1)	(3.5)	1.5	38.1	頁岩 北上山地 古生代	下半欠損		
290	Ⅲ層 横出中	削器		4.7	3.2	0.8	13.1	頁岩 北上山地 古生代			
291	Ⅲ層	石斧未成品	3	10.4	4.3	2.0	100.5	砂岩 北上山地 古生代	未完成 磨り面が剥離を切っている		
292	Ⅲ A13 Ⅲ層・Ⅲ A14 Ⅲ層	石斧未成品	1A	20.6	5.4	3.7	423.1	ホルンフェルス 北上山地 古生代 (更成は中生代白堊紀)	未完成 折れ有(複合) 折れのため失敗品?		

第32図 石器（1）



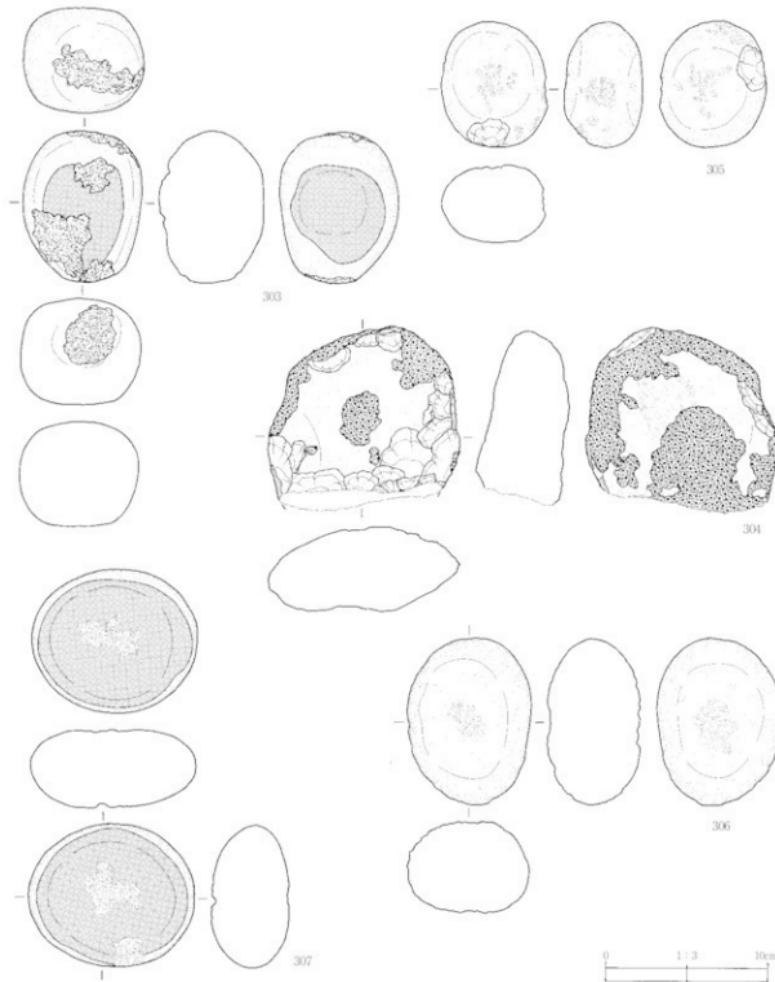
	位置・層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質・产地	残存状況	その他	備考
293	ⅡA13 Ⅲ層	石斧未成品	1A	10.0	5.2	5.1	303.7	ホルンフェルス 北上山地 古生代 (變成は中生代白堊紀)	未成品 下半折れ		
294	ⅡA14n Ⅲ層・Ⅱ A14 Ⅲ層	石斧未成品	2	11.3	5.0	2.9	339.5	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	未成品 折れ有(複合) 刻離一研磨		
295	ⅡA15 Ⅲ層	石斧未成品	2	12.3	6.4	4.0	446.1	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	未成品		
296	ⅡA14n Ⅲ層	石斧未成品	1A	14.9	7.2	4.2	646.7	ホルンフェルス 北上山地 古生代 (變成は中生代白堊紀)	未成品 刻離段階		
297	ⅡA16 Ⅲ層(下)	石斧未成品	2	(14.1)	6.4	5.1	691.8	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	未成品 1/4 自然面残る		
298	ⅡA15 Ⅲ層	石斧未成品	2	11.8	8.2	6.1	959.2	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	未成品 砕き石のようにも見える 打 痕有(ほとんど自然面)		

第33図 石器(2)



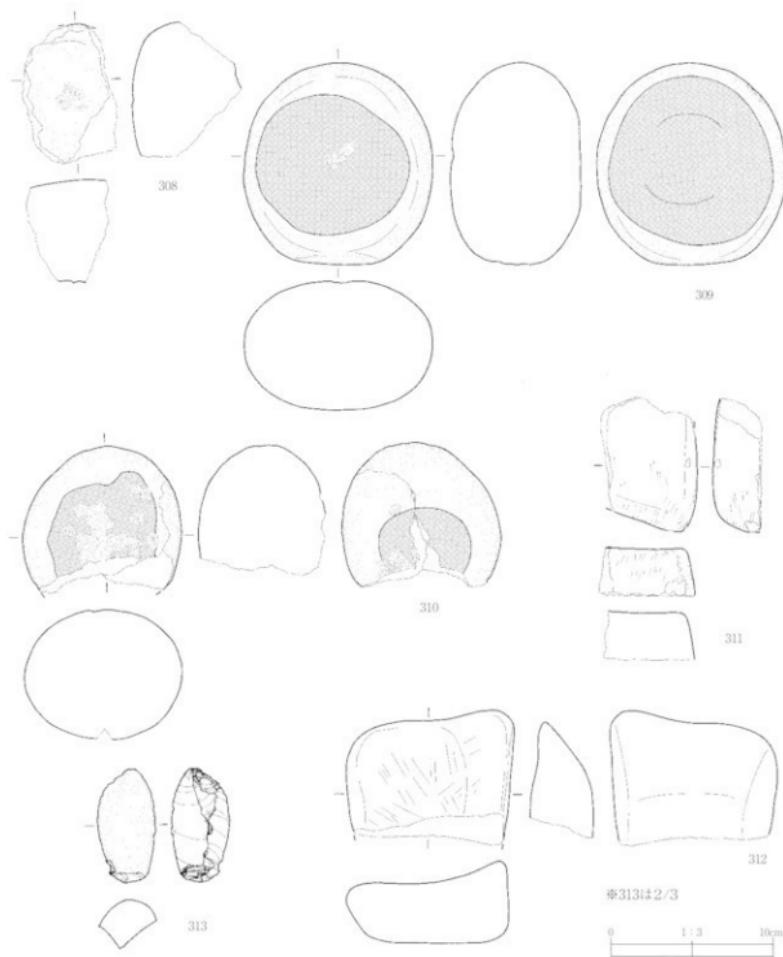
	位置・層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質・産地	残存状況 その他	備考
299	II A1 Ⅲ 層	石斧未成品	1A	8.8	4.6	2.8	186.9	花崗閃緑岩 北上山地 中生代白堊紀	未成品。下半折れ、磨り面あり？	
300	II A1 Ⅲ 層	石斧未成品	2	(14.1)	(9.5)	(7.1)	1,069.5	花崗閃緑岩 北上山地 中生代白堊紀	未成品。一部剥離。ほとんど自然面で石材のまま	
301	II A1 Ⅲ 層	石斧未成品	1A	(12.0)	9.2	(3.4)	446.3	細粒閃緑岩 北上山地 中生代 白堊紀	上半？欠損	
302	東壁トレンチⅢ層	刮石	5種	7.0	5.8	6.1	331.7	赤色頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	鼓き 4面	

第34図 石器（3）



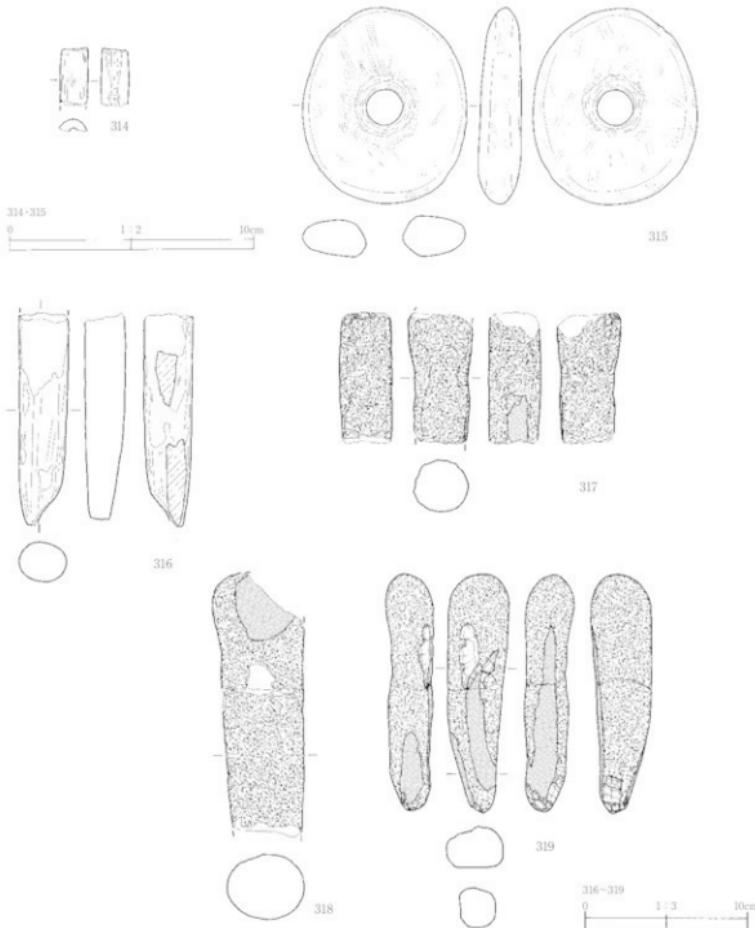
	位置・層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質・産地	残存状況 その他	備考
303	II A13 Ⅲ層	鉄石	1種	9.4	7.4	6.5	645.4	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	裏に磨り面あり	
304	II A12 Ⅲ層(下)	鉄石	3種	(11.4)	11.9	5.7	1,029.8	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀		
305	II A14n Ⅲ層	鉄石	1種	7.8	6.6	4.8	339.9	安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	赤色顔料付着	
306	II A13 Ⅲ層	鉄石		10.3	7.7	5.8	349.6	安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀		
307	Ⅲ層下段～Ⅲ層上面	鉄石		10.2	8.8	4.8	633.3	ディサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	削いた部分あり	

第35図 石器（4）



	位置・層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質・产地	残存状況	その他	備考
308	ⅢA1a Ⅲ層	刮石		(8.7)	(5.6)	(6.6)	356.8	安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	欠損多い。磕片		
309	ⅢA1a Ⅲ層(下) Ⅲ層	磨石		12.5	11.7	8.1	1,785.2	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	敲打痕による凹み1面あり		
310	ⅢA1a Ⅲ層	磨石		(9.1)	9.9	8.0	943.3	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	欠損あり 斜面あり(接着)		
311	ⅢA1a Ⅲ層	砸石		8.3	6.0	3.0	270.2	細粒閃綠岩 北上山地 中生代白堊紀	直角に近い稜線有 欠損		
312	ⅢA1a Ⅲ層	砸石		(8.3)	10.4	5.1	568.4	細粒閃綠岩 北上山地 中生代白堊紀	欠損		
313	ⅢA1a Ⅲ層	黑曜石剥片		3.5	1.8	1.5	7.6	黒曜石 奥羽山脈 新生代新第三紀?			

第36図 石器(5)



立花南遺跡石製品観察表

位置・層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質・产地	残存状況	備考
314	II A1a Ⅲ層	菅玉	(2.4)	1.2	2.1	2.1	蛇紋岩 宮守周辺 古生代オルビドス紀	欠損 1/2以下	
315	II A1b Ⅲ層	塊状石製品	8.0	6.7	1.8	95.1	凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀		
316	II A1c Ⅲ層	石棒未成品	II (13.1)	3.0	2.5	153.9	ホルンフェルス 北上山地 古生代 (変成は中生代白亜紀)	欠損	
317	II A1d Ⅲ層	石棒未成品	I (8.1)	3.9	3.2	178.8	鰐鰹閃緑岩 北上山地 中生代白亜紀	欠損 侧面に磨り面あり	
318	II A1e Ⅲ層 - II A1f Ⅲ層	石棒未成品	I (16.1) (5.6)	4.0	504.0	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	欠損 頭部有(折れ)		
319	II A1g Ⅲ層	石棒未成品?	?	14.6	3.7	230.6	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	兩加工? 斷れ? →磨り面を敲打痕が切っている。	

第37図 石製品

## (b)管玉、環状石製品（第37図314、315）

いずれも1点のみで、全点掲載した。

## (i)石棒（未成品）（第37図316～319）

6点出土し、4点掲載した。石棒の形が見えるものをI類、不明瞭なものをII類とし、I類が3点、II類が2点、再加工品と思われるものが1点である。

## 参考文献

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006「金附遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第482集

第2表 出土位置別土器重量（単位g）

出土位置	位置別総量
II A10j III層	2,195.6
I A10k III層	7,462.9
II A10l III層	2,431.5
II A11i III層	1,535.1
II A11j III層	12,030.7
II A11k III層	6,204.6
II A11l III層	1,736.5
II A12i III層	3,120.5
II A12j III層	6,114.6
II A12k III層	2,492.7
II A12l III層	1,009.2
II A13h III層	1,099.4
II A13i III層	12,525.1
II A13j III層	6,429.1
II A13k III層	989.8
II A13l III層	182.6
II A14h III層	24,504.6
II A14i III層	10,889.9
II A14j III層	1,949.5
II A14k III層	747.9
II A14l III層	20.0
II A15h III層	9,156.0
II A15i III層	16,494.8
II A15j III層	2,347.3
II A15k III層	50.2
II A16i III層	3,660.8
II A16j III層	216.4
II A16k III層	124.4
II A18i III層	19.8
II A9k III層	1,960.7
II A9l III層	387.8
1号焼土	99.2
款間跡埋土一括	314.5
II層下位～III層上面	1,236.3
攢乱	94.5
北側 I層	103.9
調査区南西端法面	32.8
排土	31.1
東壁 表土(1回目)	172.0
東壁トレンチ 表土1回目	4.4
	176.4
東壁際 II層下位～III層上面	2.1
	2.1
東壁 III層	12.8
東壁トレンチ III層	1,098.1
東壁トレンチ III層	327.7
東壁トレンチ III層	1.8
東壁トレンチ III層	1,998.5
	3,438.9
北西側 III層	146.4
北西側 炭混じり層上の暗褐	13.6
北西端法面炭化物層	43.0
北西法面 検出中	210.3
	413.3
北東壁 III層	24.5

第3表 不掲載石器・剥片類（一部）観察表

No.	位置・部位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質・産地	特徴・残存状況
320	II A10j 直層	石鉗	II Aa	2.8	0.8	0.6	1.3	真岩 北上山地 古生代	
321	II A12i 直層	石鉗	II Aa	2.0	0.9	0.5	0.6	真岩 北上山地 古生代	
322	II A13i 直層	石鉗	II Aa	3.3	1.1	0.5	2.3	真岩 北上山地 古生代	
323	II A13j 直層	石鉗	II Aa	2.7	0.9	0.4	0.9	真岩 北上山地 古生代	基部にアスファルト付着
324	II A14b	石鉗	II Aa	3.9	1.0	0.5	1.3	真岩 北上山地 古生代	
325	II A14b	石鉗	II Aa	2.6	0.9	0.4	0.8	真岩 北上山地 古生代	
326	II A14b	石鉗	II Aa	3.0	1.1	0.5	1.5	真岩 北上山地 古生代	他より少し幅がある
327	II A14h 直層	石鉗	II Aa	3.4	0.9	0.5	1.6	真岩 北上山地 古生代	
328	II A15j 直層	石鉗	II Aa	3.1	1.1	0.6	1.3	真岩 北上山地 古生代	
329	II 層下位～直層上面	石錐	II ab	(2.2)	1.2	0.7	1.4	真岩 北上山地 古生代	上半欠損
330	II A10k 直層	石錐	0	(2.3)	0.9	0.6	1.0	真岩 北上山地 古生代	上半欠損
331	II A14j 直層	石錐	0	(2.7)	1.2	0.7	2.3	真岩 北上山地 古生代	頭薄い、先端やや薄い→石錐の可能性有？ 上半欠損
332	II 層下位～直層上面	石錐(未完成)	I 21	3.2	1.6	0.9	4.3	真岩 北上山地 古生代	
333	II A13i 直層	石錐(未完成)	I 21	3.2	1.9	0.9	6.1	真岩 北上山地 古生代	
334	II A16i 直層	石錐(未完成)	I 21	4.0	1.8	1.0	5.3	真岩 北上山地 古生代	
335	II A10j 直層	剥片？		5.9	5.5	2.3	83.6	真岩 北上山地 古生代	
336	II A10k 直層	削掻器	(a)	3.2	2.6	1.0	9.3	真岩 北上山地 古生代	
337	II A10k 直層	削掻器	(a)	2.6	1.6	0.6	2.6	真岩 北上山地 古生代	
338	II A10j 直層	削掻器	(a)	6.1	5.1	1.0	46.3	ホルンブルース 北上山地 古生代(変成は中生代後紀)	
339	II A13j 直層	削掻器	(a)	2.9	1.2	0.5	2.3	ホルンブルース 北上山地 古生代(変成は中生代後紀)	
340	II A13j 直層	削掻器	(a)	4.2	2.0	1.0	7.7	真岩 北上山地 古生代	
341	II A14b	削掻器	(a)	3.0	1.9	1.0	5.2	赤色真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
342	II A14h 直層	削掻器	(a)	2.6	2.0	0.3	1.5	真岩 北上山地 古生代	
343	II A15j 直層	削掻器	(b)	4.4	3.0	1.2	13.4	真岩 北上山地 古生代	
344	II A12i 直層	石核	復核？	4.1	3.4	2.2	29.7	真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
345	II A12k 直層	石核	?	4.1	2.9	2.1	21.0	真岩 北上山地 古生代	
346	II A12j 直層	石核	?	3.1	1.7	1.6	8.4	赤色真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
347	II A10j 直層	石核	?	2.6	2.4	2.2	14.6	赤色真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
348	II A11k 直層	石核	?	4.4	3.5	2.1	43.7	真岩 北上山地 古生代	
349	II A11k 直層	石核	?	3.6	3.4	1.8	23.8	真岩 北上山地 古生代	
350	II A10j 直層(下)	石核	?	5.5	3.7	2.7	46.1	真岩 北上山地 古生代	
351	II A13j 直層	石核	?	4.8	3.7	2.3	42.1	ホルンブルース 北上山地 古生代(変成は中生代後紀)	
352	II A14h 直層	石核	?	5.3	3.3	1.9	34.2	真岩 北上山地 古生代	
353	II A14h 直層	石核	?	5.1	3.7	2.9	32.1	真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
354	II A12j 直層	石核	?	5.1	5.0	2.7	62.0	真岩 北上山地 古生代	
355	II A15h 直層	石核	?	4.8	4.5	2.6	47.1	真岩 北上山地 古生代	
356	II A14b	石核	?	5.9	4.7	2.9	56.3	真岩 北上山地 古生代	
357	II A11i 直層	石核	?	6.4	5.0	4.1	112.5	赤色真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	一辺に鋸き痕有
358	II A9k 直層	石核	?	6.6	5.8	4.9	185.8	真岩 北上山地 古生代	自然面2面残る
359	II A11i 直層	石核	?	8.5	6.2	3.4	163.7	真岩 北上山地 古生代	自然面1面残る
360	II A11j 直層	石核	?	6.2	5.9	3.8	130.6	赤色真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
361	II A13j 直層	石核	?	6.2	6.0	4.2	153.4	赤色真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
362	II A14h 直層	石核	?	7.0	7.1	3.7	99.2	真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
363	II A15j 直層	石核	?	8.9	5.6	4.4	188.0	真岩 美羽山脈 新生代新第三紀	
364	II A10j 直層	石核	?	8.0	6.3	3.6	121.2	真岩 北上山地 古生代	

No.	位置・層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質・産地	特徴・残存状況
365	II A10 Ⅲ層	石斧未完成	IA	10.5	7.5	5.4	507.4	真岩 北上山地 古生代	欠損
366	II A下位～Ⅲ層上面	石核	?	12.2	7.9	7.4	595.2	真岩 羽山脈 新生代新第三紀	
367	II A13 Ⅲ層	石核	石核	10.9	9.9	7.3	930.0	真岩 羽山脈 新生代新第三紀	周辺にうら欠き
368	II A15 Ⅲ層	石棒	?	8.2	3.8	2.9	105.9	細粒閃緑岩 北上山地 中生代白亜紀	
369	東壁レングチⅢ層(?)	石棒	I	9.7	4.5	3.4	241.1	ビン岩 北上山地 中生代白亜紀	折れ接合
370	II A13 Ⅲ層	石皿?		15.1	12.2	4.6	1,143.7	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	平坦な自然破の裏面使用? 刻離しており実用不明
371	II A16 Ⅲ層	石皿		15.3	10.1	4.2	558.2	安山岩 羽山脈 新生代新第三紀	周辺欠損、1辺のみ研錐していない部分残る
372	II A10k Ⅲ層(?)	石皿?		16.6	9.8	8.9	1,670.6	花崗閃緑岩 北上山地 中生代白亜紀	欠損
373	II A10k Ⅲ層	石斧未完成	IA	13.9	13.7	4.8	1,256.7	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	平坦な裸の周囲うら欠き
374	II A13 Ⅲ層	石斧未完成	IA	8.7	7.7	4.2	404.9	砂岩 北上山地 古生代	
375	II A14 Ⅲ層	石斧未完成	IA	12.6	9.5	2.0	393.8	ホルンフェルス 北上山地 古生代(変成は中生代白亜紀)	
376	II A13 Ⅲ層	石斧未完成	IA	6.5	7.6	3.2	344.7	ホルンフェルス 北上山地 古生代(変成は中生代白亜紀)	欠損
377	II A14 Ⅲ層	石斧未完成	IA	6.6	7.2	3.8	218.8	ホルンフェルス 北上山地 古生代(変成は中生代白亜紀)	欠損
378	東壁トレーシチ Ⅲ層	石斧未完成	IA	17.4	12.7	6.5	2,152.1	ホルンフェルス 北上山地 古生代(変成は中生代白亜紀)	2辺うら欠き
379	II A6 Ⅲ層	石斧未完成	IA	6.9	4.2	2.0	83.5	砂岩 北上山地 古生代	折れ 下半欠
380	II A14h Ⅲ層	石斧未完成	IA	5.5	6.2	1.5	71.7	真岩 北上山地 古生代	折れ 上半欠
381	II A14h Ⅲ層	石斧未完成	IA	7.6	4.5	2.3	93.7	真岩 北上山地 古生代	折れ 上半欠
382	II A10 Ⅲ層	石斧未完成	IB	9.2	4.4	1.3	72.1	真岩 北上山地 古生代	擦り面1面 薄くなりすぎ?
383	II 層下位～Ⅲ層上面	石斧未完成	IB	13.1	6.4	1.8	161.7	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	自然面1面に残る
384	II A13 Ⅲ層(?)	石斧未完成	IA	7.3	5.1	1.3	66.7	砂岩 北上山地 古生代	自然面1面に残る
385	II A13 Ⅲ層	石斧未完成	IA	10.3	4.3	1.9	98.5	砂岩 北上山地 古生代	自然面1面に残る
386	II 層下位～Ⅲ層上面	石斧未完成	IB	9.9	4.2	1.9	84.8	ホルンフェルス 北上山地 古生代(変成は中生代白亜紀)	
387	II 層下位～Ⅲ層上面	石斧未完成	IB	11.2	5.2	2.5	125.5	真岩 北上山地 古生代	自然面1面 刃先残る
388	II A13 Ⅲ層	石斧未完成	IB	12.3	5.8	2.3	88.9	ホルンフェルス 北上山地 古生代(変成は中生代白亜紀)	
389	II A13 Ⅲ層	石斧未完成	IB	13.1	5.5	3.1	233.0	砂岩 北上山地 古生代	
390	II A14n Ⅲ層	石斧未完成	IA	12.2	4.3	2.2	181.3	砂岩 北上山地 古生代	剥片からでなく、細長い石材から→剥打
391	II A15 Ⅲ層	石斧未完成	2	9.8	6.0	3.2	268.4	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	
392	II A13 Ⅲ層	石斧未完成	2	10.4	5.8	2.7	264.1	砂岩 北上山地 古生代	源石→剝離
393	II A10k Ⅲ層(?)	石斧未完成	IA	17.6	7.5	4.6	608.0	片麻岩 北上山地母体変成岩 古生代オルドビス紀	源石→剝離
394	II A12k Ⅲ層	石斧未完成	IA	14.1	11.1	6.5	968.2	砂岩 北上山地 古生代	
395	II A13 Ⅲ層(?)	石斧未完成	IA	16.8	7.0	5.1	613.0	花崗閃緑岩 北上山地 中生代白亜紀	源石→剥打
396	II A15h Ⅲ層	石斧未完成	IA	20.1	12.6	6.7	2,323.3	シラ岩 北上山地 中生代白亜紀	
397	II A13 Ⅲ層	凹石		8.7	8.0	7.1	382.6	安山岩 羽山脈 新生代新第三紀	周囲欠
398	II A14h Ⅲ層	凹石		9.2	8.1	4.7	522.4	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	赤色少量化着
399	II A15h Ⅲ層	凹石		10.6	8.9	4.9	576.4	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	
400	II A10k Ⅲ層(?)	凹石		11.8	7.9	5.6	590.2	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	タール状付着物
401	II A13 Ⅲ層	凹石		9.7	8.6	3.1	284.1	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	細粒閃緑岩 刷面利用
402	II A14h Ⅲ層	駆石	5個	8.4	3.5	3.3	172.4	細粒閃緑岩 北上山地 中生代白亜紀	剥打底2側縫
403	II A13 Ⅲ層(?)	駆石	1個	10.7	7.0	4.3	420.2	砂岩 北上山地 古生代	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀
404	東壁トレーシチ Ⅲ層	駆石		12.1	10.6	6.6	1,204.8	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	剝面磨り底
405	II A16 Ⅲ層	駆石		9.6	7.4	6.3	384.1	ビン岩 北上山地 中生代白亜紀	欠損
406	II A13 Ⅲ層	駆石		11.1	8.8	6.5	964.3	花崗岩 北上山地 中生代白亜紀	剝面磨り底
407	II A15h Ⅲ層	駆石		8.3	7.7	5.5	339.9	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	擦り面無し
408	II A13 Ⅲ層	駆石		11.6	8.2	4.2	649.9	ビン岩 北上山地 中生代白亜紀	
409	II A10k Ⅲ層	駆石		12.0	10.5	9.2	1,583.8	デザイナート 羽山脈 新生代新第三紀	擦り面1面

## V 総括

### I 特論

#### (1) 立花南遺跡出土の縄文～弥生土器（第38～41図）

野外調査時に土器の出土状況を見て、その一括性に目を見張り、山内清男氏による土器型式の定義、すなわち「一定の形態と装飾を持つ一群の土器であって、他の型式とは区別される特徴を持つ」（山内 1964 : p.148）ているという印象を受けた。一群の土器は、立花南遺跡から3kmしか離れていない同様の遺跡、金附遺跡を調査した経験から（（財）岩手県文化振興事業団 2006）、金附遺跡第Ⅲ群2類、すなわち、いわゆる青木畠式（佐藤 1980、1981）であるとわかった。青木畠式のまとめた資料は現在でも少ないので（金子 2007）、本遺跡の資料は、その型式内容を知る上で貴重であると考えた。今回の調査では、検出された遺構は少なく、遺物もそれほどでもなかったのに、当センターでしばしば行われる略報という形を採らずに一冊の独立した報告書として刊行したのは、こうした理由によるものである。そして、原則として、5×5cm以上の大きさで文様のあるものは全て掲載することにした。地文縄文のみや無文のものは、一周残存しているものしか取り上げていない。

さて、第IV章で出土地点別に掲載した縄文～弥生土器を、器種・器形ごとに並べ直したのが第38～41図である（第17図110は割愛）。破片や形・大きさ等からどちらに含めたら良いかはつきりしないものは、その境界付近に並べている。また、観察表作成者と本章執筆者が異なるため、解釈に若干の違いが生じていることをお断りしておく。

整理時に、第38図左端中段=第20図148が目に留まった。青木畠式がいくら漸移的な土器型式と言っても（金子 2007 : p.175）、この土器は口縁部形態にしても文様にしても、青木畠式まではとても下らず大洞A'式の古段階であることは間違いないと思われる。残念ながら、野外調査時の所見は印象に留まり、遺物包含層において途中に砂の再堆積という間隔を挟む地点があったことを裏づけるように、一括性は覆された。しかし、時期変化が最も鋭敏に現れる高坏の台を見ると（第38図）、極めて共通性が高く、ほとんどが青木畠式に相当すると思われる（波状文が少ないと確かだが）。また、第40図左下=第12図54は、広い意味での異系統の土器=弥生式系の甕であるが、全く同様の土器が、青森県上牡丹森遺跡第2号住居跡（大鰐町教育委員会 1986 : 図14の7）、秋田県諒訪台C遺跡S I 61号住居跡（秋田県教育委員会 1990 : 第40図190）から出土しており、何れも同じ住居跡から青木畠式の高坏が出土している（上牡丹森遺跡では図17の46、諒訪台C遺跡では第41図199）。

ただし、立花遺跡の出土土器が、金附遺跡の第Ⅲ群2類に比べて粘土粒を貼付した変形工字文を持つ土器の割合が多いことは確かである。高坏の台も、第38図上部中央=第26図222などは小さく、金附遺跡第Ⅲ群1類、すなわち大洞A'式新段階の可能性が高い。

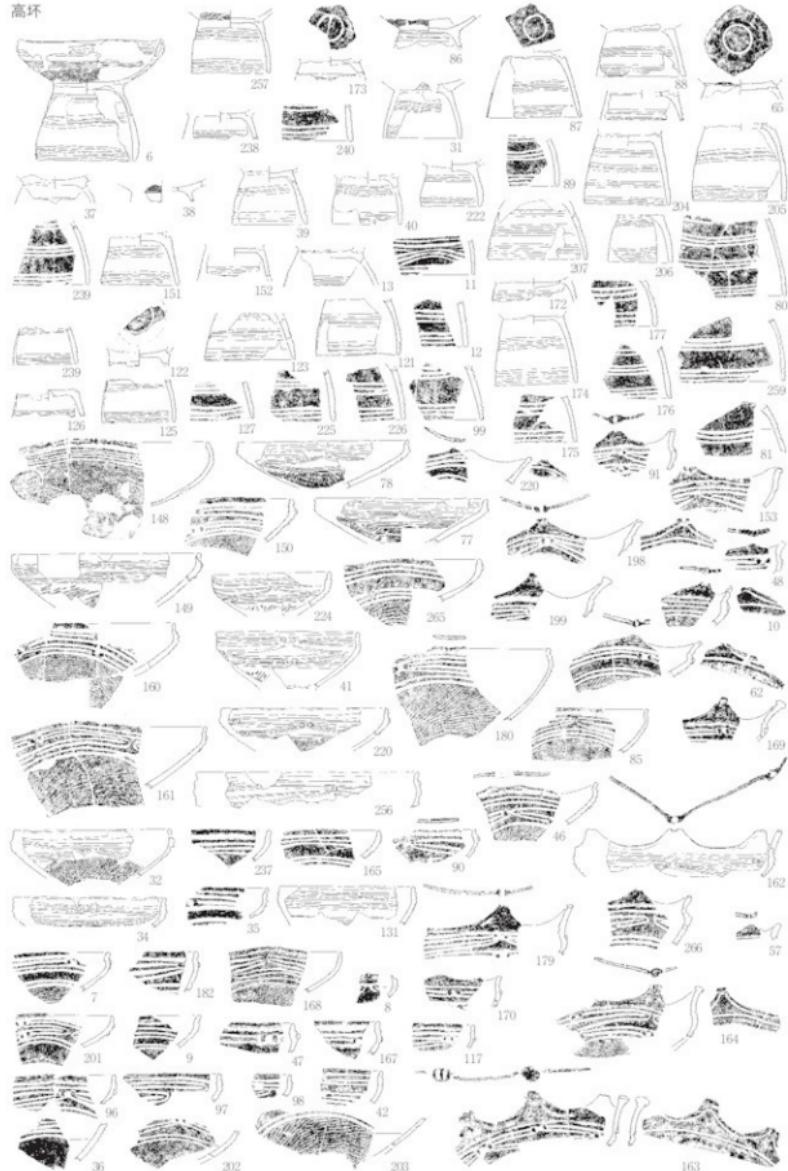
以上から、今回の調査で出土した土器は、青木畠式を主体としながらも、大洞A'式古段階からの土器を含んでいて、時期が下るにつれ増えていった様相を示していると解釈される。

### 参考文献

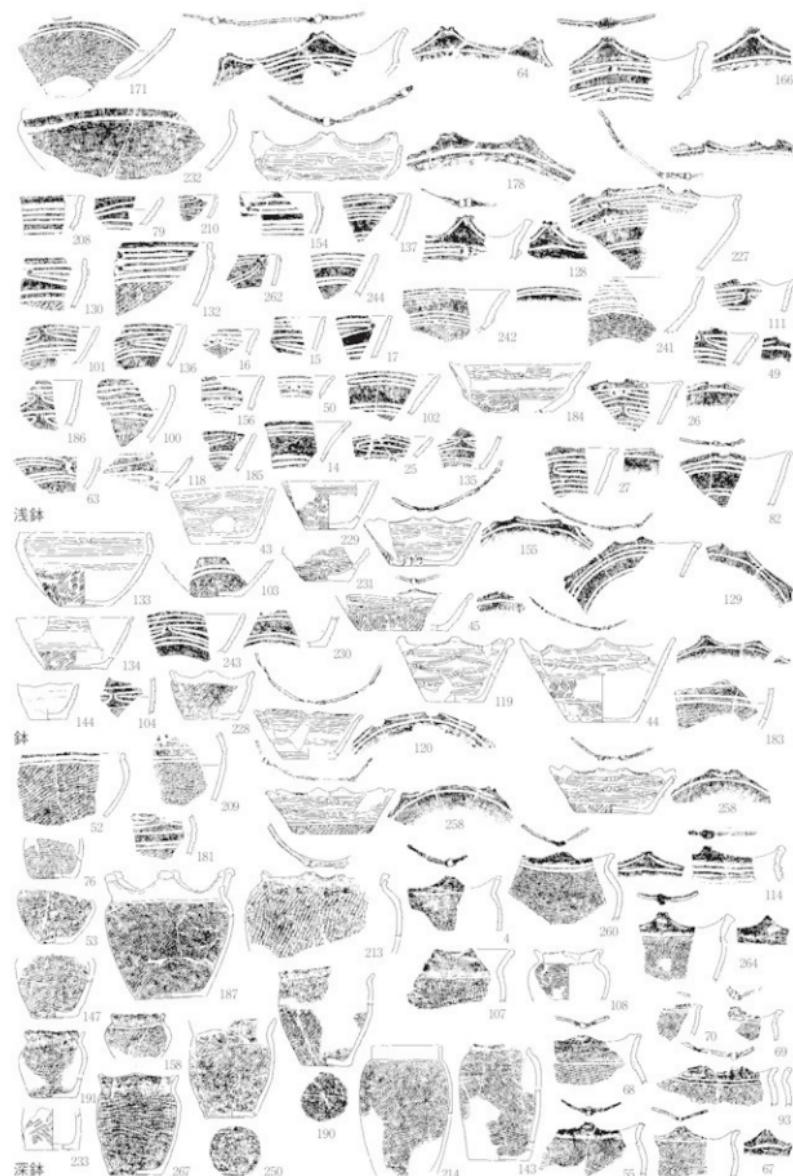
秋田県教育委員会 1990『諒訪台C遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第196集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告

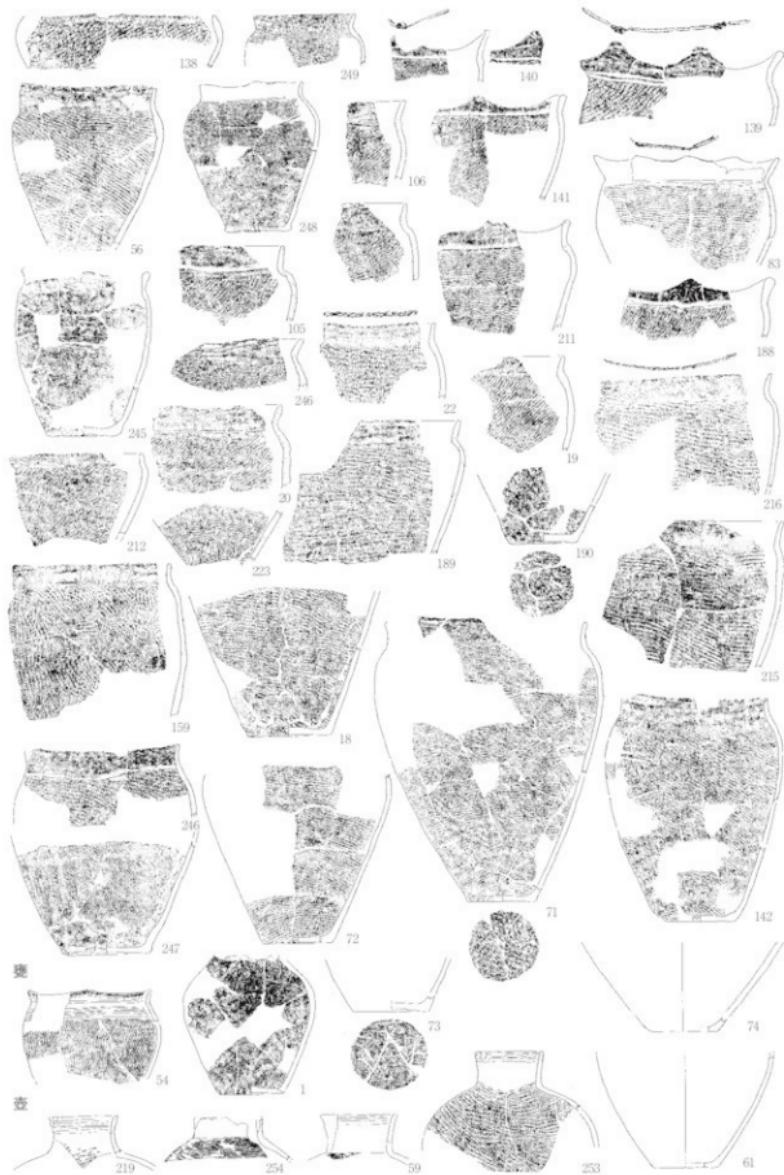
## 高坏



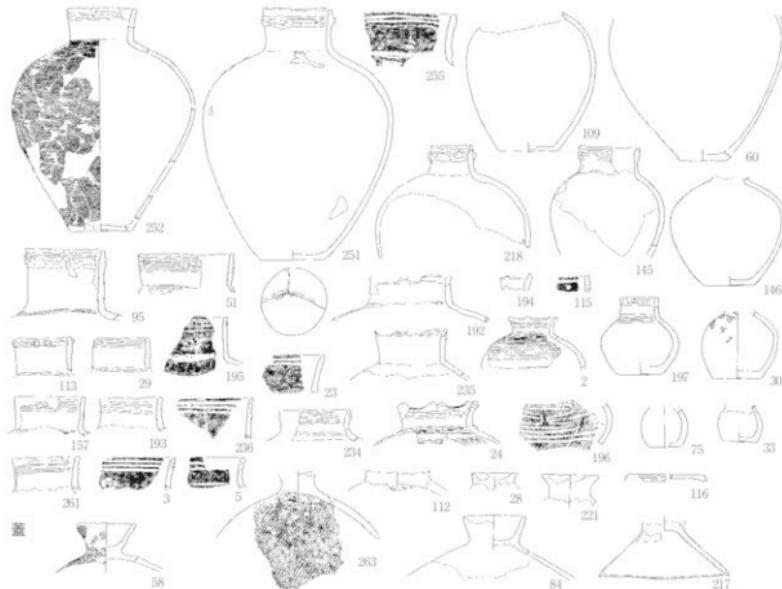
第38図 器種・器形別土器集成図（1）（S=1/6）



第39図 器種・器形別土器集成図（2）(S=1/6)



第40図 器種・器形別土器集成図（3）（S=1/6）



第41図 器種・器形別土器集成図（4）（S=1/6）

大鰐町教育委員会 1986「上牡丹森遺跡発掘調査報告書」大鰐町文化財調査報告書第1集

金子昭彦 2007「大洞A」式から青木縞式へ『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会

佐藤信行 1980「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化（上）」「考古風土記」第5号

佐藤信行 1981「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化（下）」「考古風土記」第6号

山内清男 1964「縄文式土器・総論」「日本原始美術1 縄文式土器」講談社

## （2）立花南遺跡出土の土偶（第42図）

第42図に今回調査で出土した土偶を集成した（269～276）。そして、以上が立花南遺跡のこれまでの調査で出土した土偶の全てのようである。小片ばかりで全体像が掴みににくいので類例を搜してみた。第42図に掲げたが（a～o）、当該期は類例に乏しく、ふさわしい例はあまり見つからなかった。立花南遺跡から3kmしか離れていない当該期の遺物が大量に出土した金附遺跡（財）岩手県文化振興事業団（2006）に、やはり類例は比較的多く見つかっている（第42図a～k）。以下「第42図」省略。

269は、e～gのような結髪土偶の結髪部分と思われる。270も結髪土偶の顔部と思われるが、同様の表現は、金附遺跡（h～j）、岩手県陸前高田市川内遺跡（陸前高田市教育委員会 2003）

（1）、青森県弘前市宇田野（2）遺跡（青森県教育委員会 2007）（m）などに見られた。276は、宇田野（2）遺跡例（m）のような扁平の顔部の一部であろうか（276は天地逆かも知れない）。271は、岩手県一関市細田遺跡例（（財）岩手県文化振興事業団 1999）（o）のような結髪土偶の脚部であろうか。272のように脚部を左右連続した裾広がりに表現する土偶は、金附遺跡（k）、岩手県普代村芦渡遺跡（『土偶とその情報』研究会 1996）（n）などに見られた。いわゆる台式土偶（山内



第42図 立花南遺跡出土土偶と類例

1930) (鈴木 1993) である。275も、その仲間になるのか、小片で良くわからないが、類例は金附遺跡でも認められた (d)。273、274の下半身無文の土偶も、台式土偶の一部となろうか。金附遺跡にも類例はある (a ~ c, e ?)。

269~276の時期。271が o のような土偶の一部なら、乳房の形状などから大洞 A 式新期あるいはそれ以降の可能性がある (金子 2004)。270も、顔表現が抽象化してきていて、同じ頃の可能性が高い。それ以外は、既に結髪あるいは刺突文土偶の範疇から逸脱してきていて青木畠式以降の可能性が高い (金子 2004)。これらの位置づけが正しいとすれば、前節で検討した土器の出土傾向に符合する。

## 参考文献

- 青森県教育委員会 2007『宇田野②遺跡・宇田野③遺跡・草庵④遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第217集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『細田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第283集
- 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第482集
- 金子昭彦 2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第114号 早稲田大学考古学会
- 鈴木正博 1993「荒海貝塚文化の原風土」『古代』第95号 早稲田大学考古学会
- 『土偶とその情報』研究会 1996『土偶シンポジウム5宮城大会 東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶—』
- 山内清男 1990「『所謂亀ヶ岡式土器の分布』云々に関する追加」『考古学』第壹卷第四號 東京考古学会
- 陸前高田市教育委員会 2003『川内遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第25集

## 2 遺跡のまとめ

### (1) 立花南遺跡の歴史

#### (a)縄文時代晚期中葉以前

今回の調査では出土していないが、市教育委員会の2003年度の調査で縄文時代前期末の土器が (北上市教育委員会 2004 : 実測図版14の9)、同2005年度の調査で中期末の土器 (北上市教育委員会 2007 : 写真図版16の右下) が出土している。土器片を伴う何らかの活動が断続的に行われていた可能性があるが、中期末の土器は「摩耗が激しく縄文時代の遺構も付近に存在しないため、北上川の氾濫等により流れ込んだものと考えられ」ている (北上市教育委員会 2007 : p. 5)。

#### (b)縄文時代晚期中葉～晩期末

今回の調査では出土していないが、当センターの前回調査で大洞 C 2式土器が出土しており ((公財)岩手県文化振興事業団 2011 : 第11図28)、図示はされていないが、大洞 A 式土器も出土したそうである (同 : p.15)。大洞 C 2式土器は、北上市教育委員会調査でも出土しており (北上市教育委員会 2004 : 実測図版14の11)、今回の調査では、大洞 A 式古期の土器片が出土している (第38図左端中央148)。晩期後半、本遺跡で土器片を伴う何らかの活動が継続して行われていたことは確実だが、集落を形成するには至っていない可能性が高い。

#### (c)弥生時代前期

大洞 A 式新期～青木畠式期。今回調査で最も痕跡の多い時期である。自然堤防上から西側の後背湿地にかけて捨て場が形成される。遺物量から考えて集落が形成されていたことは確実と思われる。今回の調査では堅穴住居跡は発見されていないが、調査区の東側、北東から南西方向に延びる自然堤防上に集落があると推測される。石鎚、磨製石斧、石棒、さらに前回調査では環状石製品 (石斧) も、

未成品が出土しており（(財)岩手県文化振興事業団 2011：第12図43）、これらの製作が行われていたことは確実である。石器組成を見ると、通常のトゥールが少なく未成品が多いことから、通常の集落というよりは、ある程度石器製作に重きを置いた集落であった可能性が高い。

#### (d)奈良～平安時代（8世紀後葉～9世紀前半）

今回の調査では痕跡が薄いが、本遺跡の主体となる時期である。遺跡範囲の東側の自然堤防上を中心に集落が営まれた。堅穴住居跡以外では、焼成遺構の検出が多い（北上市教育委員会 2002、2004、2007）。川縁という立地を反映してか、土鍤の出土が目立つ（北上市教育委員会 2002：実測図版11の5～10、12の16、2004：実測図版14の4、5）。祭祀的な性格を持つと考えられる赤彩球胴壺の出土量も多い（北上市教育委員会 2002：p. 9）。

#### (e)それ以後

今回の調査で土人形らしきものが出土しており、岩手県教育委員会の調査区で井戸跡らしきものを見つかっている（岩手県教育委員会 2003：p.48）。何らかの活動が行われていた可能性が高いが、痕跡は薄い。

### （2）地域の中で

今回主に発見された绳文時代末～弥生時代前期に的を絞って周辺の遺跡と比較する。晩期後半には、立花南遺跡の対岸に大規模な拠点集落遺跡が存在している。このうち牡丹畠遺跡（第5図22）（北上市 1968、(財)岩手県文化振興事業団 1991、北上市教育委員会 2003、2009ほか）は、大洞C2式期、九年橋遺跡（第5図23）（北上市教育委員会 1991ほか）は、大洞C2～A式期の大量の遺物が出土した。前後の時期も認められるが、立花南遺跡の主体となる大洞A「式新期～青木畠式期の遺物はほとんど見られない。特に牡丹畠遺跡は、逆に、その後の谷起島式期になると再び土器が出土するようになり、立花南遺跡とはばねガ・ボジの関係にある。すなわち、当時の人々が牡丹畠遺跡と立花南遺跡の間を行ったり来たりしている可能性が窺われるのである。ただし、出土量は1：1の関係でなく、牡丹畠遺跡の大洞C2式期の方が圧倒的に多いので、立花南遺跡だけでは収まりきらず、3kmほど下流にある金附遺跡（(財)岩手県文化振興事業団 2006）等にも移動している可能性がある。なぜ移動するのかと問われれば、一般的に周辺資源の枯渇、ゴミの蓄積等が考えられるが、川縁で移動している点と今回の調査結果から、河原から採取される良質な石材を求めての可能性もある。

### 参考文献

- 岩手県教育委員会 2003『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成14年度）』岩手県文化財調査報告書第116集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991『上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第153集
- 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第482集
- 2011「(1)立花南遺跡」「平成22年度発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第588集
- 北上市 1968「北上市史第一巻 原始・古代(1)」
- 北上市教育委員会 1991「九年橋遺跡第10次調査報告書（補遺）」北上市文化財調査報告第66集
- 2002『立花南遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第49集
- 2003『牡丹畠遺跡（2002年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 2004『立花南遺跡（2003年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第63集
- 2007『立花南遺跡（2005年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第82集
- 2009『牡丹畠遺跡（2008年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第97集

写 真 図 版



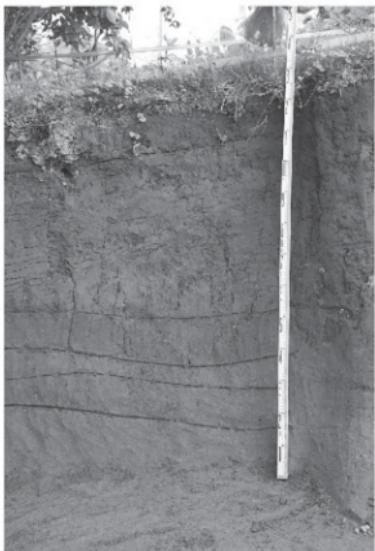


調査前風景（北西から）



調査前風景（南西から）

写真図版 1 調査前風景



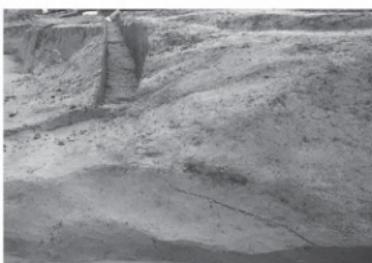
調査区北東端 断面（南から）



後背湿地 断面（南から）



Ⅲ層確認状況1（南から）



Ⅲ層確認状況2（南から）



調査区南西端 Ⅲ層上・下 断面（西から）



作業風景（西から）

## 写真図版2 基本土層、Ⅲ層確認状況



歛間状遺構 完掘（北から）



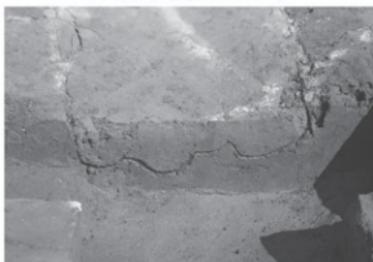
歛間状遺構 1条断面（西から）



歛間状遺構 2条断面（西から）

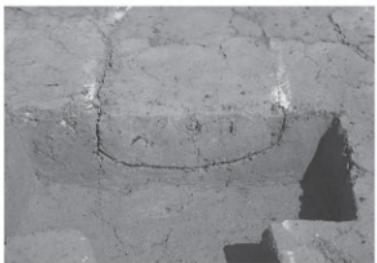


歛間状遺構 3条断面（西から）



歛間状遺構 4条断面（西から）

写真図版3 歛間状遺構（1）



欽間状遺構 5条断面（西から）



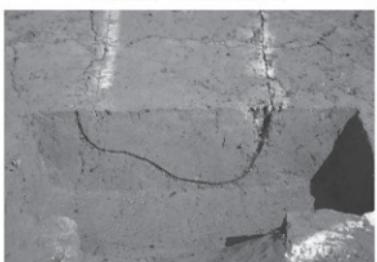
欽間状遺構 6条断面（西から）



欽間状遺構 7条断面（西から）



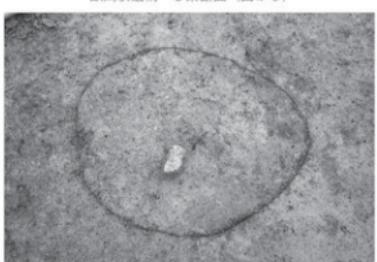
欽間状遺構 8条断面（西から）



欽間状遺構 9条断面（西から）



作業風景（北から）



1号焼土 梁出状況（東から）



1号焼土 断面（東から）

写真図版4 欽間状遺構（2）、1号焼土



調査区北東端 炭化物集中区 検出状況（北東から）



調査区北東端 炭化物集中区 植出状況（東から）



調査区東端 炭化物集中区 検出状況（東から）



作業風景（南東から）

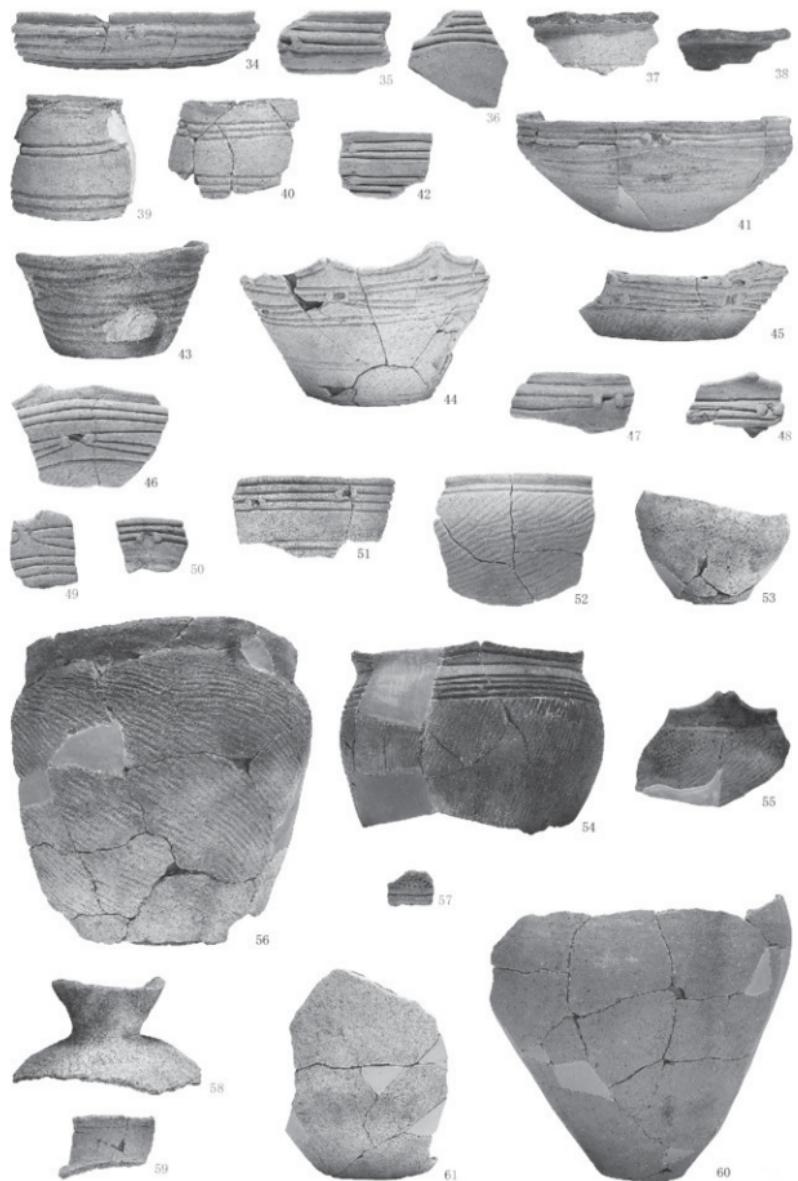


後背湿地 完掘（南から）

写真図版5 炭化物集中区、調査区全景



写真図版 6 繩文・弥生土器 (1)



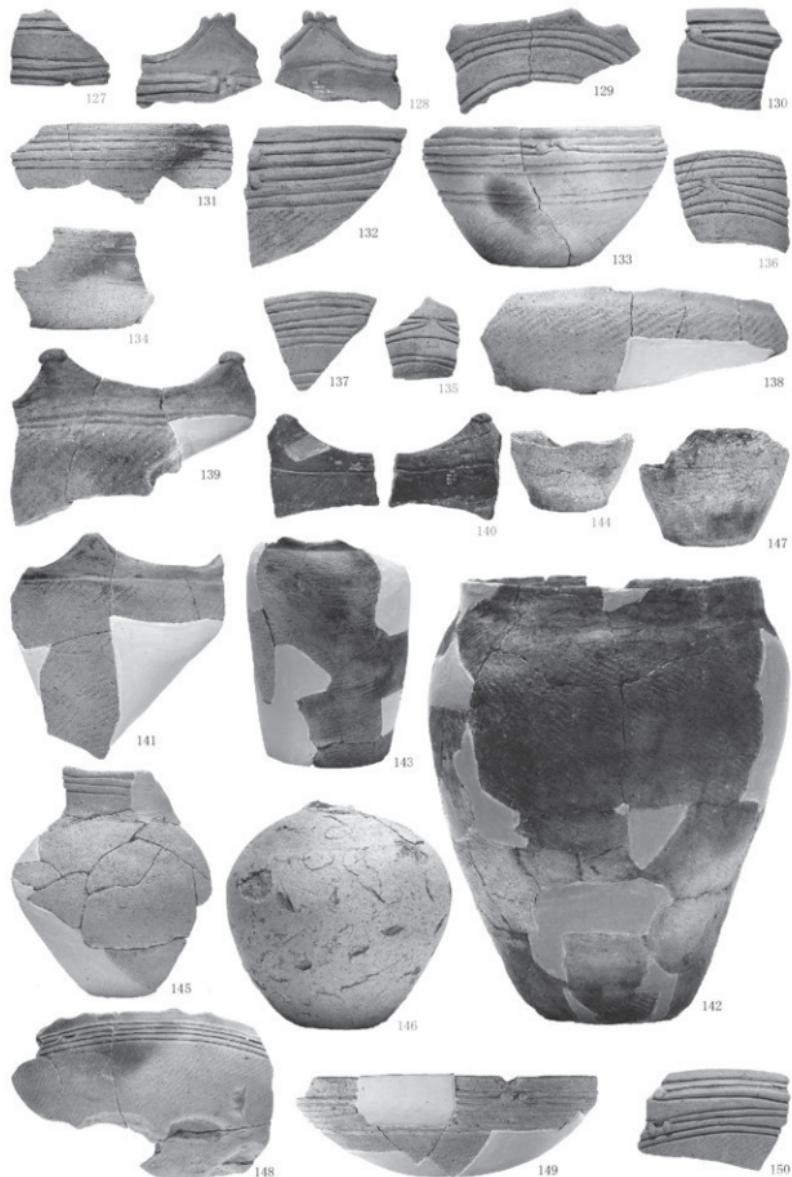
写真図版7 繩文・弥生土器（2）



写真図版8 繩文・弥生土器（3）



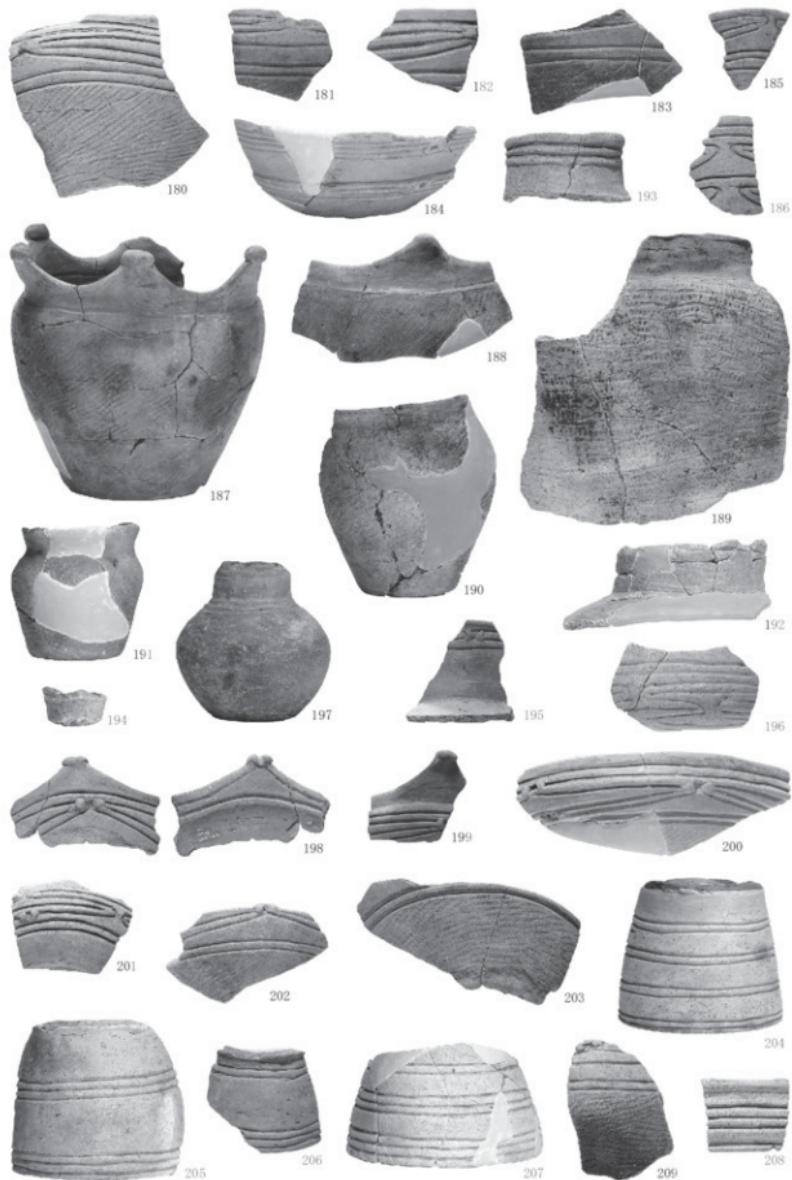
写真図版9 繩文・弥生土器（4）



写真図版10 繩文・弥生土器（5）



写真図版11 繩文・弥生土器（6）



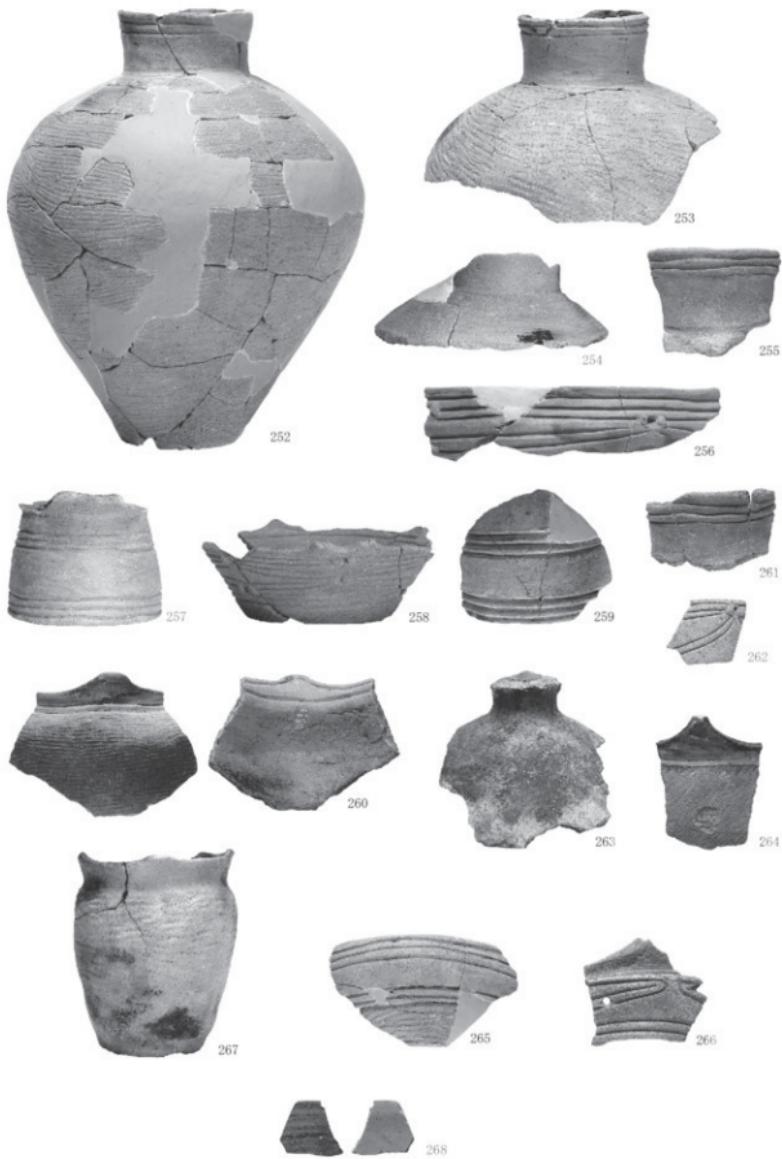
写真図版12 繩文・弥生土器（7）



写真図版13 繩文・弥生土器（8）



写真図版14 繩文・弥生土器（9）



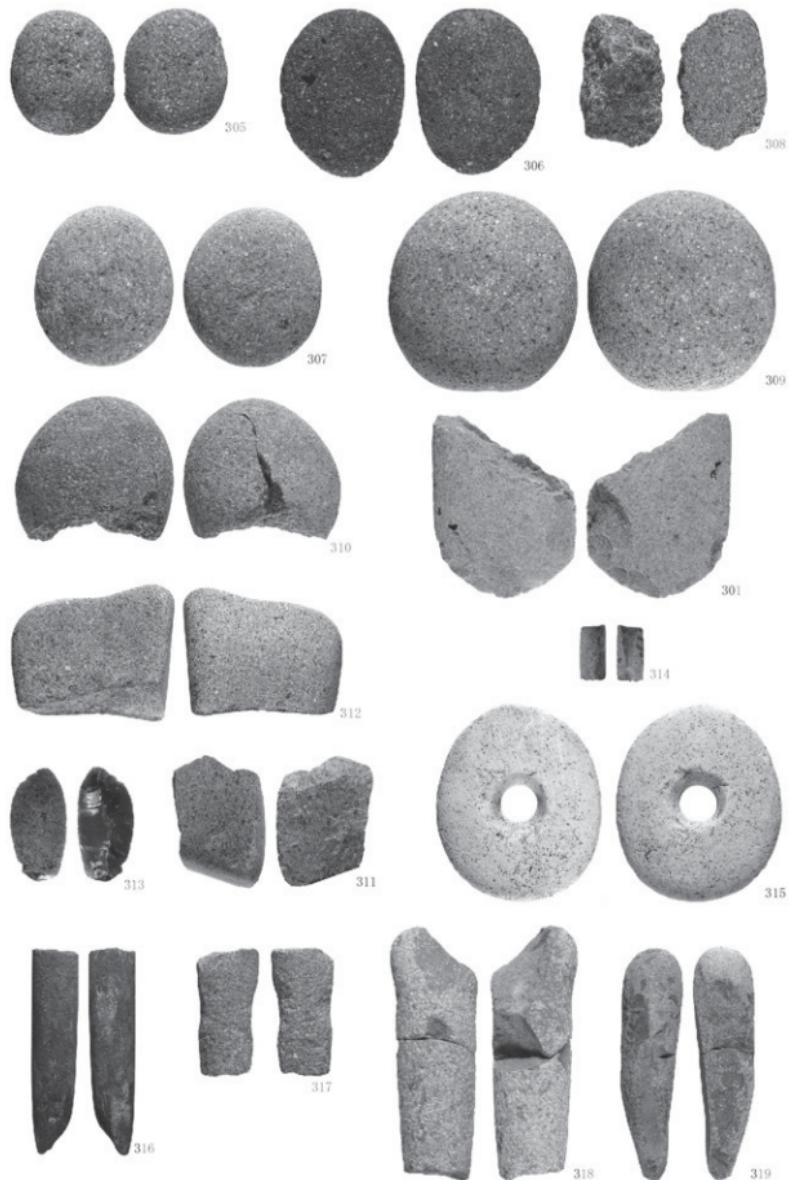
写真図版15 繩文・弥生土器（10）、須恵器



写真図版16 土製品



写真図版17 石器 (1)



写真図版18 石器（2）、石製品

## 報告書抄録

ふりがな	たちばなみなみいせきはくつちょうさうこくしょ								
書名	立花南遺跡発掘調査報告書								
調書名	北上川中流域緊急治水対策事業（立花地区）関連遺跡発掘調査								
卷次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第621集								
編著者名	金子昭彦								
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001								
発行年月日	西暦2014年3月20日								
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'\"	調査期間	調査面積	調査原因		
たちばなみなみいせき 立花南遺跡	いわてけんみたかみ上 岩手県北上市 立花第12 うち 地割58、59	03206	ME66-2128	39度 16分 49秒	141度 07分 44秒 2012.06.06 ～ 2012.07.13	634m <sup>2</sup>	北上川中流域 河川改修事業		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
立花南遺跡	集落跡	縄文時代 晩期末 ～ 弥生時代 前期	焼土1基 遺物包含層1箇所	土器大コンテナ11箱 (153kg) 土製品15点 (土偶4、円盤状土 製品5、不明1、 焼粘土塊1) 石器類大コンテナ6箱 (117kg) (石鏃15、削搖器10、 磨製石斧未成品36、 凹石・磨石14点、 調片類78kg) 石製品8点 (石棒未成品6、管玉1 環状石製品1点)	大洞A・式新期～青木 煙式期主体。 大洞A・式古期は土器 片1点。	石器類は未成品が多く を占める。			
	集落跡	奈良～ 平安時代	竪間状遺構1基？	須恵器片1点					
		近世以降		土人形1点？					
要約	<p>立花南遺跡は、北上川によって形成された北東～南西方向に延びる自然堤防上と周辺の後背湿地に立地する南北に長い紡錘形をした遺跡である。</p> <p>これまでの調査で、縄文時代前末期・中期末の土器片が出土し、晩期中葉大洞C2式期～弥生時代前期青木煙式期の継続的な土器散布地、奈良～平安時代（8世紀後葉～9世紀前半）の集落跡であることがわかっている。</p> <p>今回の調査で、弥生時代前期青木煙式期を主体とする遺物包含層が検出され、当時集落が形成されていたことがわかった。石器組成から、その集落は磨製石斧や石棒等の製作に重きを置いていたと推測される。縄文晩期中葉～弥生前期の遺物を出土する遺跡が周間に比較的多く認められることから、やや頻繁に移動していた様子が窺われ、移動理由として良好な石材を求めての可能性を推測した。</p> <p>竪間状遺構は、今回の調査結果からは弥生時代前末期以降としかわからないが、南側隣接区の当センターによる調査で8世紀後半～9世紀前半と推測されたものが検出されていることから、この時期の可能性もあると推測される。</p>								

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 621 集  
**立花南遺跡発掘調査報告書**

北上川中流部緊急治水対策事業（立花地区）関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 26 年 3 月 12 日

発 行 平成 26 年 3 月 20 日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地  
電話 (019) 638 - 9001

発 行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
〒 020-0066 岩手県盛岡市上田四丁目 2 - 2  
電話 (019) 624 - 3198

(公財)岩手県文化振興事業団  
〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番地 1 号  
電話 (019) 654 - 2235

印 刷 (株)橋本印刷  
〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 1 丁目 15 番 29 号  
電話 (019) 652 - 1354

---